師範學校

國文教科書

卷四

5α
810
明41

42657
教科書文庫
4
810
51-1904
20000
81503

資料室

文部省檢定濟
明治三十七年三月二日　師範學校國語科教科書

吉田彌平編

卷四

師範學校國文教科書

東京　光風館藏版

52
810
明41

師範學校

國文教科書卷四目錄

一　トルストイ家の家庭教育その一（口語文）　一頁
○　トルストイ家の家庭教育その二（口語文）　十三
二　國語と愛國心と　上田萬年　十九
三　熊王發心の事　隱士松翁　二十七
四　寛成親王　隱士松翁　三十四
五　底ひなき（短歌）　三十九
六　相模灘の落日　德富健次郎　四十
○　ヒマラヤ紀行　四十四

広島大学
教
81503
図書

七　格言十則　新井白石　五十七　五十五
八　源頼朝を論ず　中村正直　六十四
○　良友
九　室鳩巣を見舞ふ書（書翰文）　新井白石　六十八
室鳩巣　七十三
十　門生に諭す　澤柳政太郎　八十
○　ペスタロッチを論ず
十一　笠置の御沒落　作者未詳　八十八
十二　大塔宮の熊野落　作者未詳　九十八
○　をしへ子に戒む　本居宣長　百八
十三　星と花（新體詩）　土井晩翠　百九

十四　長谷部信連　作者未詳　百十
十五　高倉院　作者未詳　百二十三
十六　雲察上人に答ふる書（書翰文）　太宰春臺　百三十
○　わが一生（口語文）　福澤諭吉　百三十三
十七　福澤先生を悼むその一　島田三郎　百三十八
十八　福澤先生を悼むその二　島田三郎　百四十七

師範學校國文教科書卷四目錄終

師範學校國文教科書卷四

一　トルストイ家の家庭教育その一

宋人の詩に「一樹の高花遠村明かなり」と云ふ句があります、偉人もまたかやうなもので、千萬人の中に一人の秀でた人物があれば、遠い國のはてまでも、あの彼處にあんな人が居ると、其の人ばかりか、其の居所までも、すぐ眼につくのです。畢竟、喬木は村の目標、偉人は國の目標、トルストイ翁の如きは卽ち露西

亞の目標でございませう。

トルストイと云へば、歐洲屈指の大小說家、否二十世紀の今日に珍しい賢哲である。身は伯爵の貴族でありながら、世間一切の虛榮を棄てて己れを潔うし、人を濟ひ、兵隊と軍艦と速射砲と爆裂彈との世界に、萬人平等愛と平和と潔白とを以って生活する無形の大帝國を打ち建てようとして、心を碎き身を勞して居る大慈大悲の大人物である。

トルストイ翁は露國貴族社會の人達と正反對の嗜好をもって居る。それは翁が交際社會を嫌って家庭を愛し、都會を忌んで田舍を好むの一事で。翁の宿願は健全な家庭を作りたいと云ふ事なのです。露西亞の上等社會は、夏は田舍の所有地に避暑をなし、其の餘は都會に生活するといふ風ですが、翁は結婚後二十年近くと云ふものは、常に田舍のヤスナヤポリヤナに住

トルストイ（寫眞）

んで居ました。冬はモスクバに行くが、これも不本意ながら行くのです。

四十年前のソフィア、アンドリーブナ嬢、今のトルストイ伯爵夫人はモスクバの有名な醫者の娘で、嫁に來た時は十八歳でした。花婿は當年三十四歳、伯爵家の末子で、早く孤兒になって叔母に育てられ、大學を中途で退いて軍人になって、クリミヤ戰爭に出て、それから文學者になって、一寸外國に行って歸った處で、二三著作はありましたが、まだ大家の列には這入って居なかったのです。伯爵夫人は子供の時から

らちゃんと日記をつけ、又時時は小說や物語も書いたのですが、得意は畫でありました。なかなか氣象の勝った人で、容貌も立派な淑女です。性質は良人と同樣、眞摯率直、虛飾とか僞とか云ふ事は蟲よりも嫌ひです。家政をあづかって、それから九人の子供が何れも十歳になるまで自身で育てて、教へて、著物まで拵へて、そして財產の管理、書籍の出版まで一人で切りまはして居る位ですから、並並の婦人でないことは勿論です。

夫人の內助は家政の上、子供の上ばかりでなく、翁が

文學上の著作も其の補助を待つ事が少なからぬのて。翁の傑作小説「戰爭と平和」などは著作に八年もかかったので、七百頁の本が四册もあるが、夫人は徹頭徹尾七回淨寫しました。翁が著作は出版したのも、しないのも、唯の一枚として伯爵夫人の淨寫を經ないものはない。翁が興に任せて紙きれに例の惡筆でもって書き流した處は、字、字を爲さず、句、句をなさず、速記者のおぼえ書きよりも甚だしいもので、誰れが見ても決してわからない。それを、夫人は字を足し句を補ってちゃんと整理して行きます。翁も

此の事に就いては常に驚嘆して居るのです。それゆゑ翁は深く夫人を尊敬して、何事も一應夫人に打ち合はせなければ行はないのです。一寸散歩に出かけるにも「待て、待て。家の總理大臣に一つ相談して見なければならん」。

しかし子供の教育の仕方に到っては、翁が方針を立てて、夫人も全くこれに從ってやって居るのです。翁の子供は都合十三人ありましたが、今達者で居るのは九人です。何れも皆伯爵夫人自身の乳で育てたので、決して乳母を雇ひませんでした。尤も二番

目の女が生まれた時は、夫人が大病になって乳母を雇ひましたが、現在吾が子が他人の乳を吸って居るのを見るに忍びず、病氣の夫人はすぐ其の場で乳母を解雇して仕舞ひました。

家庭教育に就いては、翁も餘程考へたので、根本の主義はルソーのエミールに基づいて、それに[illegible]を加へたのです。畢竟、成るたけ人爲の制限をやめて子供を自由に自然に發達させるのが、翁の家庭教育の第一義です。嫡子の生まれた時は保姆も一切雇はないでやって見たのですが、何分、身分から云っても、

境遇から云っても、保姆や私宅教師を雇はないでは居られないものですから、せん方なく雇ひは雇ったのです。が、子供も、子供の御附の者も、皆主人と主婦とで直接に監督して、子供は成るべく自由にして、どんな事があっても嚴刻な處置や刑罰はさせません。此の事については英國程、よく屆いた處はない。で、トルストイ家では倫敦から年若な保姆を雇ひ入れました。

翁がまづ第一の務として保姆や師傅に言ひ含めて置いたのは、成るべく子供を自然に近づかせると云

ふ事、卽ち人と自然との關係を教へるので、凡そ自然界の物は如何樣な物でもよく子供に見知らせ、色色の動物蟲類に至るまでよく見知る樣に、愛する樣に、こはがらない樣に癖をつけさせました。一方には自然の大きな事、自然の前では子供はかよわいものである事、長者に賴らなくてはならぬことを知らせると共に、自然を愛して恐れない樣にならせる目的なのです。我が邦の家庭では、動もすれば、わんわんが來たの、毛蟲が出るのとおどかして、子供の恐怖心を挑發する弊がありますが、これは餘程戒むべき事

で「畢竟人間は自然界に孤立する事は出來ぬ。自然は人間の敵でなく、人間は割合に弱いものの、しかし世に恐るべきものはない」といふ事を子供に知らせるのは、最も大切な事でありませう。

それから、翁は人と人との關係を教へました。人間は平等なもの、同情と愛とは人間の大切な道である事をよくよく子供に呑み込ませる爲に、數多い僕婢に何か用事をいひつけるにも決して横柄にしてはならぬ、かくかくの事をせよではなく、これこれの事をして下さいと賴まなくてはならぬと云ふ事を、く

れぐれも子供に吹き込んだのです。

翁が第一の禁物は虚言で、子供にも虚言は決して容赦しません。併し、トルストイ家の罰は少し風がはりで、體罰は勿論、子供を部屋に閉ぢ籠めるとか、椅子に立たせるとかいふこともせず、唯子供に悪い事があって是非とも罰の必要な時は、兩親とも一切其の子供には頓著しないで、子供が何と言っても、何をしても、注意もしなければ構ひもせずに、うっちゃって置くのです。心から後悔の風があらはれると、其の罰も中止します。併し唯一通り御免と云ったり、も

う致しませぬと云った位では、決して許さないのです。名婦鑑に據る

○ トルストイ家の家庭教育その二

トルストイと云ふと、一寸様子を知らない者から見れば、何だか始終澄まして居る、小むづかしい、嚴しさうな老人の様に思はれますが、それはそれは面白い、滑稽好きな、子供の様に無邪氣な處のある、愛らしい、なつかしい老爺です。（と云ふと、何だか見て來たやうですが）非常に子供好きで又子供にも好かれるのです。翁は子供の心を開く黄金の鍵でも持って居るかして、どんなに内氣な、はにかむ子供でも、翁が一言云へば、さらりと解けて心置なく囀づるです。翁は眞に子供の心を讀む人で、或時のことですが、翁の子供らが走

って來て「おとうさん、おとうさん、私共は面白い事を知って居るの。　え、云って上げませうか。　分かりますまい」と頻りに笑って云ふので、翁は子供の耳に口を寄せて「御前たちの大事な祕密と云ふのは、これこれだらう」と云ふと、子供らはびっくりして「まあ、内のおとうさんには驚いた。　どうして知っていらっしゃるの」と叫んだことがあります。　翁と子供との間には何か電氣の樣に通って居るものがあると見える。

で、翁の一家では、子供が翁を愛することは非常なもので、翁と一處なら十五露里もあるツーラまで、平氣に歩いて往き還り致します。　獵にでも出掛けると、男の子供はどんな遠方までもついて行きます。　體操をするとか、さもなくば何か遊戯をするから來いとか、翁が一言云へば、それこそ一同歡天喜地と云ふ有樣です。　翁も今少し若い時分は、冬になれば、子供と一處に氷すべりに行ったり、氷池の雪を掃ったり、蛙飛をしたりしましたのです。　今でも一家團欒して興が旺んになると、翁は突然跳び立って片方の手で手綱を握る眞似をし、片方の手は空に打ち振って部屋の中を無二無三に跳び廻るのです。　これをトルストイ翁のヌミヂヤ騎兵隊進擊の振事と唱へて、子供のみか大人までも翁に倣って跳び廻ります。　四角四面な流儀から云ふと、一家の主翁、假にもトルストイ伯と云はれる程の人物が斯樣なまねをするのは、馬鹿馬鹿しい樣な、品格にさはる樣な風にも考へられませうが、翁の天眞爛漫たる所は、實にこんな所にあらはれて居ます。

翁は一見粗豪な風をして居るに引きかへて、眞にやさしい人です。若い時は隨分强情な、氣の暴い方ださうでしたが、餘程克己の修業をしたと見えて、家をもつてからは、一度も僕婢を叱つた事はなく、子供が何か泣き顏をすると「そんなに泣き顏するぢゃない、顏が崩れるよ」と滑稽に取りなして慰め戒め、牛馬犬猫に對しても決して手荒いことは致しません。家を愛するのは實に翁の天性で、たまたま用事があつて外出したり、旅行したりするのも、實は其の本意でないので、旅行や銃獵から歸つて來て、家が見えると、無事であればよいがといつも掛念らしい聲を出します。

子供が段段大きくなるにつれて、今までは父母を見まね聞きまねして居たのが、次第に批評的になつて來る。此の際に處する親の處置はなかなか大切な者で、ややもすれば、こ

んな場合に一家の和合を破るものです。翁は子供をば子供と云ふよりも、まづ人として考へて居ました。卽ち此の子供と云ふ者は自分と同じく人間の大道を踏んで自由に發達運動すべき權能を賦與されたもので、親と云ふ自分は保護す可き責任があり、模範となる可き責任があるもので、親子でもあれば師弟でもあり、兄弟でもあり、朋友でもあると考へて居ました。で、子供の時から害ある感化を遮る外は、成るべく自然に自由に發達するやうにして、決して强制を施しません。子供が生長して後も、萬事なるべくそのなすがままにして、自身は唯經驗のかどを子供の參考に供して、判斷を子供に任せました。しかし、何れも何れも長ずれば長ずる程、いよいよますます翁を敬愛して、互に睦しくして居るのは實に珍しい。先年露國に遊んで翁を訪はれた

蘇峯氏の記事の中に、左の如く言ってあります。

晩餐には翁の妹の孫にしてモスクバ大學にある壯年、及び翁の二男にして士官たる者、二人を加へぬ。翁は菜食者たるにかかはらず、その長男夫妻は翁と卓を同じうして肉を喫しぬ。翁は兵役を拒むを以って人生要務の一となすにかかはらず、其の次男は軍帽を著け軍服を被り長劍を佩び、年少士官として其の側に坐しぬ。而して、一家夫妻父子兄弟姉妹舅姑、嬀色婉容を以って相交はる、不思議と云ふも愚かなり。

實に不思議、併し翁が人物を知り、翁が家庭教育に如何程心を用ひたかを考へて見ると、別に不思議な事もない、實に當然の事であります。名婦鑑に據る

二　國語と愛國心と

上田萬年

わが日本國は一家族の發達して一人民となり、一人民の發達して一國民となりしものにて、神別、皇別、蕃別の名ありといへども、今日にては、すべてこれらの種別は全く鎔化し去られたり。これ、實に國家の一大慶事にして、一朝事ある秋に當たりて、われわれ日本國民が協同の運動をなし得るは、主としてその忠君愛國の大和魂とこの一國一般の言語とをもてる大和民族あるによりてなり。故に、日本國民の義務として、この言語の一致と人種の一致とをば、帝國の

歴史と共に一歩もその方向より誤り退かしめざるやう勉めざるべからず。かく勉めざるものは、日本國民を愛する仁者にあらず、また日本帝國を守る勇者にあらざるなり。

凡そ、一人民が話す言語とその人民の性質との間には、最も入り組みたる關係あるものにて、その人民が一事物に對して感じ、あるひは考ふるすべての事は皆その言語に反射し出づるなり。故に「言語はその話す人の精神の上に生活する思想及び感情が、外に出でて化身したるものなり」といふも、決して不可な

きなり。

試に支那語を見よ、いかに仁義の道がかれらの間に行はれしかは、歴史をまたずして、言語の上に明かなり。文人國に詩歌の語おほく發達し、武人國に武人の語おほく繁昌す。英語の商業における、佛語の社交における、獨逸語の理論における、皆それぞれ、その人民の長所によりて發達したるものなり。

言語はこれを話す人民にとりては、恰もその血液が肉體上の同胞を示すが如く精神上の同胞を示すものにして、これを日本國語にてたとへていはば、日本

人の精神的血液なりといひつべし。日本の國體はこの精神的血液にて主として維持せられ、日本の人種は、この最も強かるべく、最も永く保存せらるべき鎖のために、散亂せざるなり。故に、大難の一度來たるや、この聲の響くかぎり、四千萬の同胞はいつにても耳を傾くるなり、いづこまでも赴きて、飽くまでも助くるなり、死ぬるまでもつくすなり。しかして、一朝、慶報に接する時は、千島のはても、臺灣のはしも、一齊に君が八千代をことほぎたてまつるなり。

かくの如く、言語は國體の標幟となるのみにあらず、

これと同時に、また一種の教育者、いはゆる情深き母にてもあるなり。われわれが生まるるやいなや、この母はわれわれをその膝の上に迎へ取り、懇にこの國民的思考力とこの國民的感動力とを教へ込みくるるなり。されば、この母の慈悲は誠に天日の如し。苟もこの國に生まれ、この國民たり、この國民の子孫たるもの、誰れかこの光を仰がざるべき。

言語の上には、われわれが心中に一日も忘れかぬる生活、ことに人生の神代ともいひつべき小兒の頃の記念が結びつき居るものと知るべし。われわれが、

いとけなかりし頃、終日の遊に疲れはてて、すやすや、と眠に就かんとせしをり、母君は、いかにやさしき聲にて、ねよとの歌を謳ひたまひしか。頃是なき子供心に、わるふざけなどしてうち廻りし時、嚴しき父君は、いかにおごそかに教訓を垂れたまひしか。さては、隣家の垣に攀ぢて餘念なく栗の實を拾ひたるあるは、春のうららかなる野邊に友だちと蓮華草などを摘みあるきたる、すべて當時よりつかひ來たれる言語は、當時の人名、當時の地名と共に、なにともいはれぬ快感をわれわれに與ふるなり。次には小中學

校のことば、次には學生のことば、あるひは市民としてのことば、あるひは職業により、階級により、地方によりてのことば等、皆それぞれの生活をこの上に反映す。故に、外國にて人となりしか、あるひは外國人の學校にて外國語の教育のみを受けたる人ならざるかぎりは、この言語の恩澤を蒙り、この言語に感謝の意を表せざるものはなかるべし。

されば、國民がその國語を尊ぶことは一の美德にして、偉大なる國民は必ずその自國語を尊び、決してこれをおきて他の外國語を尊重せず。情の上より自

國語を愛し、理論の上よりその保護改良に從事し、以って、眞正の國民を養成せんことをつとむ。現今の獨逸の如きは、その一好例なり。

およそ、いづれの國を問はず、苟も國家の觀念の上より、その一員たるに愧ぢざる人物の養成を以って目的とする以上は、まづその國の言語、次にその國の歷史、この二つをないがしろにしては、決してその功を收むること能はず。これ、國民たるものの須臾も忘るべからざることなり。國語のため

三　熊王發心の事

隱士松翁

大夫判官赤松光範が津の國のかたためなりける時、左馬頭正儀に度度はからられけるを、くちをしく思ひこめて過ごし侍りけるに、去ぬる住吉の戰に討たれて失せし宇野六郎といひしが子に熊王といひけるが、まだをさなきとき、光範にいひけるは「正儀は我が爲にも親の敵にて候へば、いかにもしてうち侍らん。河内へこえて正儀に仕へ侍らんに、をさなく候へば、などか心をゆるし申さぬことのあるべき。たとひ心をゆるすことのはべらずとも、七とせ八とせほど

も仕へ候はば、そのうちには、うちぬべきたよりのいかでなからん。　御暇をこそ給はらめ」と涙を流せば光範もいとあはれと思ひながら「幼ければ敵の國へやらんも心もとなし。　又は命にかはりて討たれし者の子なれば、かたみとも思ふべければ」と強ひてとどめ給ひけれども「少しおとなしくなりなば、よも近づけ給はじ。　をさなくありなんとき參りてこそ」としきりに望みければ、力及び給はで、つねに身をはなち給はざりし刀を賜ひて「これにて本意とげよ」とて、阿部野まで人あまた添へてやらせけるに、それより

は我れにひとしき童一人を具して、赤坂の城に行きて、そのほとりにたたずみてありけるを、兵庫介忠元が見つけて「いかなる人にかおはすらん」とたづねられて「われは大夫尉光範の侍にて宇野六郎といひける者の小子に、熊王といへる者にてこそ候へ。　父にて侍る六郎は去ぬる時住吉の戰にうたれて候ふを、一門にて侍る備後守が我れを追ひうちて領地を奪ひ候へども、光範と心を合はせ候へば、せんかたなくて、いかなる寺へも入り侍りて僧法師にもなり、父の跡を弔ひ候はんが爲に、さすらへ侍り」といひけるを、

あはれときて、まづ我が方に伴ひてさまざまいたはりて、後に正儀にありつる事を語りて「をさなくは候へど、心のさかさかしくて」など申すに、あはれがり給ひて召し寄せ給へり。

もとより情ある人なりければ、熊王もおもひつきて、親の仇をも忘れにけるにや、よく宮仕へにけり。十五程になりければ「河内の國にてすこしなる處をしらせん」といひけれども、いかで恥ある一矢をも射さぶらひてこそ」とて辭しにけり。

あくる年の春、父が七めぐりにあたりけるに思ひつけて「こよひ正儀をうちて父の手向にもし、光範の心をも安め奉らん」とおもひたちてありけるに、その日お前にめして「けふは吉日にてあるなれば元服せよかし」とて、和田和泉守に髪あげさせて、和田小次郎正寛と名のらせ、吉野殿より給はせける鎧をたまひければ、涙を袖にかけてよろこぶ。夜に入るまで正儀の御前に在りけるが、またふと思ひ出でて「討ち奉らんならば今宵こそ」と思ひて、膝をおし直して正儀に目をかくれば、年頃の情深かりしこと、今日の元服の事など思ひつづけて「いかで情なくうち奉らん」と思

ひかへして心を鎭むれば「父の敵といひ、譜代の主君の仇といひ、一方ならねば」と思ひ定めけれども、何心もなくわたらせ給ふありさまを見ければ、御いたはしくて堪へかねけるにや、廣縁に出でて聲をあげて泣き叫ぶを、人人も正儀もおぼつかなく思ひたまうて、障子を開き見たまへるに、伏ししづめるさまのただには見えずありければ「いかに」と問はせ給ひければ、ありつる心のうちをまをして「とにかくに、君のため、先君のため、父のために、みづから死なんより外は候はず」とて刀を取り直せば、ありつる人どもみな涙にくれてありながら「いかで、さはあらん」ととりつきてはたらかせねば、力及ばで、その刀にて髻おしきり、往生院にて形をかへ、君より給はせたる名なればとて正寛法師とぞいひける。

寺の傍に草の庵をむすびて「もしも心のかはることのありもやせん」とて、往生院の門の外へは出でずして行ひてありけり。光範より給はせける刀は、ありしありさまをくはしく書きそへてかへしけりとかや。いとあはれなりける事にてこそ。吉野拾遺

四　寛成親王　　隱士松翁

寛成の皇子のいまだをさなうおはしましける時に、若き殿上人數多伴なはせ給ひて、夏見の河淀のほとりにて鷹つかはせて御覽ありけるに、傍にいと大きなる岩の、えもいはずおもしろき小松の生ひいでたるありけり。みこ御覽ぜさせて「この岩を、かへりなん時、皇居の御庭にもて參れ。うへに奉らん」と實爲中將にのたまはせければ、をさなき御心をおしはかりて、御事うけさせ給ふ。鳥などあまたとらせ給ひて還らせ給へる時に、忠行侍從に「岩を忘れ給ひし」と

のたまはせければ「民部大輔が力も強く侍れば、御後よりもて參り候ふなり」と申して皇居に入らせ給ふ。」御鷹の鳥など奉らせ給うて、實爲中將に「ありつる岩を」と召させ給ひけるに「忠行の侍從の、仰せ言を承りぬ」と申したまへば、侍從をめして「いかに」とたづねさせけるに「民部大輔の、御後よりもて參らんといひ侍りつる。民部を召させ給ひなん」とのたまへば、むづからせ給うて「中將にこそよくいひつれ。なほ、さはいふにか」とおもらせ給ひければ、中將のありつることを奏し給へば、をかしがらせ給ひて「誠におもしろ

からん岩こそ見まくほしけれ。民部が力こそゆゆしければ、もてきなんに、めさせ給へ」とのたまはするに、中將立ちたまひて、民部大輔に「かかる事なんある。いかがしてん」とのたまへば「すべきことこそあるなれ」とて、御庭にありける小さき岩に松の枝を取りつけて、中將といと重げにもちて宮の御前に据ゑ奉れば「小さくこそあれ。それにはあらじ」となほむづからせ給ひければ、民部大輔「さればこそ。その岩をもちてうへの山を通りさぶらひしに、左右より山のさし出でて、道のいとせばき處にて叶ひがたく、いかに

せましとただよひ侍りしに、むかひのかたより山伏のきたりけるが『岩にせかれて通られぬにこそ。のけ給へ』とののしりけるほどに『我れもせんかたなさにかくて侍る。いかにせまし』とわびあへるに『さらばすべきことこそあれ』とて珠數おしもみ、何やらんつぶやきて祈るに隨ひて、この岩小さくなりて、やすやす通りて候ひしほどに、山伏も行き過ぎしを呼びかへして、もとの如くに祈り直してんといひければ『また行くさきにほそき道のいでこば、いかがし給はん』といひしほどに、げにもと思ひ侍りて、そのまま持

て參りぬ」といひ給へば、うへよりはじめてありつる人人をかしがらせ給ふに、宮の御氣色もいとよくならせ給ひて「げにさもあらんことなり。その山伏を召し還せかし」とのたまはするに「はや遙かにゆき過ぎて」いづちゆくらんもしらず」と申し給へば「ほいなきことにこそあれ。とどめて民部大輔の大きなる空言をすこしきやうに祈らせんものを」との給はせける、誠に行末たのもしき御事にこそ、いとせめて覺え侍りしか。吉野拾遺

五　底ひなき

素性法師

底ひなき淵やはさわぐ、山川の
淺き瀬にこそあだ波は立て。

讀人知らず

あさみどり野邊の霞はつつめども、
こぼれてにほふ花ざくらかな。

源俊頼

もののふのやばせの船は早くとも、
いそがばまはれ、瀬田の長橋。

開けてもうばらからたちはらはずば、
また埋もれやせん、野中ふるみち。　清水濱臣

はれゆきて一きはまさるかげ見れば、
くもるや月のひかりならまし。　松平定信

六　相模灘の落日

徳富健次郎

秋冬、風全く凪ぎ、天に一片の雲なき夕べ、立って伊豆の山に落つる日を望むに、世にかかる平和のまた多かるべしとも思はれず。

日の山に落ちかかりてより、其の全く沈み終はるまで、三分時を要す。

初め日の西に傾くや、富士を初め相豆の連山煙の如く薄し。日は謂はゆる白日、白光爛として眩しきに、山も眼を細うせるにや。

日更に傾くや、富士を初め相豆の連山次第に紫になるなり。

日更に傾くや、富士を初め相豆の連山、紫の肌に金煙を帶ぶ。

此の時、濱に立って望めば、落日海に流れて吾が足下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱一帶、山と云はず、砂と云はず、家と云はず、松と云はず、人と云はず、轉がりたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として燃えざるはなし。

かかる風の夕べに落日を見る身は、恰も大聖の臨終に侍する感あり。　莊嚴の極、平和の至、凡夫も靈光に包まれて肉融け、靈獨り端然として永遠の濱に行む を覺ゆ。　物あり、融然として心に浸む。　喜と云はんは過ぎ、哀れと云はんは未だ及ばず。

已にして日愈落ちて伊豆の山にかかるや、相豆の山忽ちにして印度藍色に變ず。　唯富士の嶺、舊に仍って紫の上に、更に金光を帶ぶるのみ。

伊豆の山、已に落日を銜み初めぬ。　日一分を落つれば、海に浮かべる落日の影一里を退く。　日は迫らず、寸又寸、分又分、別かれ行く世をば顧みがちに悠悠として落ち行く。

已にして殘り一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切れて線となり、線瘠せて點となり、忽ちにして無し。

眼を上ぐれば世界に日なし。　光消えて、海も山も蒼

然として憂ふ。日は入りぬ。然も餘光の忽ち節の如く上射し、西空、金よりも黄なるを見ずや。偉人の歿せる後、實にかくの如し。

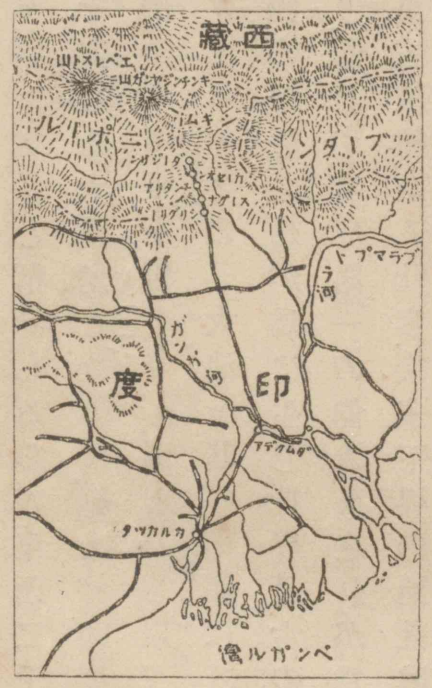
日の落ちたる後は、富士も程なく蒼ざめ、やがて西空の金は朱となり、燻りたる樺となり、上りては濃きプロシャ藍色となり、日の遺薬とも思はるる明星の、次第に暮れ行く相模灘の上に眼を開きて、明日の出日を約するが如きを見るなり。自然と人生

○ヒマラヤ紀行

ヒマラヤの四十八大峰、その高さ何れも我が富士山の二倍以上にあり。エベレストは世界第一の高峰にて、直立二萬九千九呎、海拔五哩に達す。餘脈は姑くこれを措き、其のヒマラヤ本系と稱せらるる者東西二千哩、印度大半島の北部を劃せる大障壁となりて、絶えず印度洋面より吹き送る熱帶の水蒸氣を雪となし、雨となし、以ってブラマプトラ、ガンガ、インドスの三大流を其の南側に吐き出だす。世界最豐饒の平原、之れが爲に生じ、世界最古の文明、之れが爲に起こり、而して世界第一の偉人、又之れが爲に生まれたり。千古萬古依然たる壯容、幾多下界の治亂興亡を下瞰して、今猶世界の祕密國たる西藏を背後に包擁す。其の壯大雄宕、吾人の殆ど夢想する能はざるところなり。

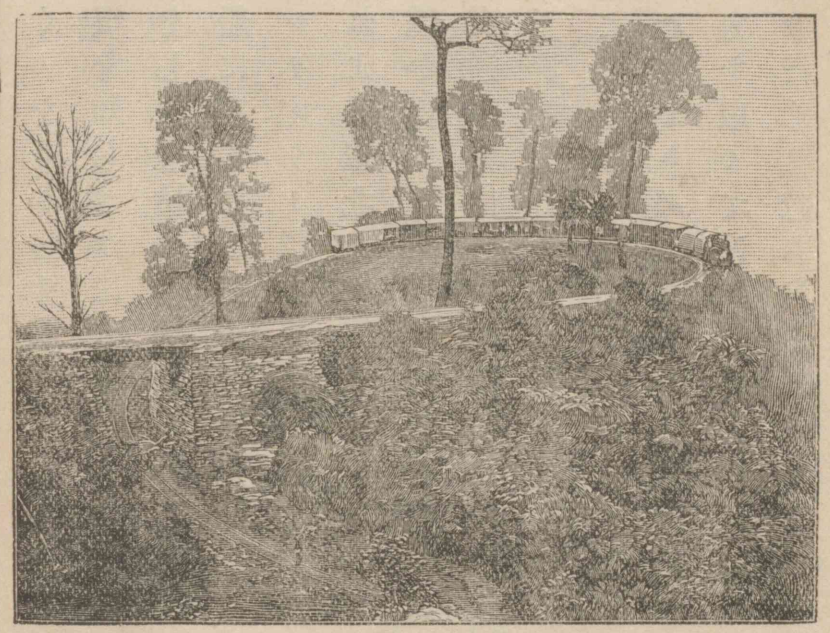
明治三十三年一月廿四日午後三時、カルカッタ市を發し汽

車に乘じて印度の北端、西藏の關門たるダージリンに向かふ。七時三十分、ダムクデア驛に達す、恒河河畔の停車場なり。恒河の河幅、此の邊は廣き處に於て三哩、狹き處に於いて二哩半あり。流れやや急にして、深淺一ならず。五百噸の汽船あり、一日五回、汽車の發著ごとに往復す。



さて汽船は徐徐として進行を始むるに、乘客は甲板の上に於いて、河上の風景を眺めつつ晩餐を喫す。晩輝已に收まり盡くして、星光水に落ち、樹木なく、岩石なく、只灰の如き微塵砂よりなれる兩岸は、模糊として一線を描く。をりから生暖き風は水面を拂うて、遠く又近く亡國の恨を知らずがほなる土人の蠻歌を送り來たり、漫ろに行客をして悲愴の情懷に堪へざらしむ。

船に在ること三十分、對岸に達し、睡眠客車に投じ、翌朝七時、シリグリー驛に達す。ここにて再び汽車を乘り換ふ。これより以北をダージリン、ヒマラヤ鐵道と稱す。軌道の幅纔かに二呎、世界無比の小汽車にて、さながら玩具のごとし。交通事業に練熟せる彼の英國政府が、幾多の歲月と莫大の工資とを費やして、辛苦經營せる末、成就せる者が、わづかにこの小鐵道なるを見ば、地の嶮峻なること、推して知るべし。これよりダージリンまで僅かに五十一哩、一時間十哩の速力を以って、連山重疊の間、毎時平均一千尺づつの高度を上り行く。忽ち見るヒマラヤの一支、雪を戴いて天空を衝き、



（寫眞）

ヒマラヤ鐵道

蜿蜒として南に走るを。快甚だし。

走ること七哩、スーグナ驛に達す。平原、茲に盡き、山勢、突兀として天を支ふる壁のごとく平原と直角をなして前方を塞ぐ。ベンガル灣頭より此の驛に至るまで三百哩、僅かに海拔三百呎を上りしに過ぎず。ダージリンまで剩す所は、只三十五哩にして、其の

間に七千呎以上の高度を攀ぢざるべからざるなり。汽車は急に速力を緩めて、如何にも臆病に、如何にも謹慎に、平原に直立せる一峰に向かって、蛇の如く徐徐として這ひ上がれり。此れより以後、或は峰腰を縫ひ、或は巒巔に匍ひ、忽ちにして千古の森林、忽ちにして萬丈の絶壁、右に曲がり左に折れ、前に在るべき機關車、常に之れを側面に見る。此の間の線路、時にはZの字をなし、時にOの字を形づくり、Uとなり、Sとなり、Wとなる。如何なる旅客も、此の間に在っては、心臟鼓動して、雙脚の自然に戰慄するを覺えざるなり。

九時十五分、チンダリア停車場に止まること二十二分、茶菓を喫す。煩熱の空氣は頓に一變して清凉となり、外套、猶寒を訴ふ。植物も熱帶のもの漸く盡きて、溫帶の樹木となる。

十一時、シリグリーより第七の停車場カーセオンと云へる

に著す。此の驛、海面より五千呎、ヒマラヤ鐵道の中にて望絶佳の地とす。仰げば白皚皚の連嶺、雲海に浮かべる群島の如く前面に連なり、脚下には雲の切れ目を通して、ベンガルの大平原、浩茫として涯りなく、恒河の流、日光に映じて細き銀線を敷きたるが如く、遠く眼界の外に去るを見る。身は恰も輕氣球に乘じて、亞細亞大陸の中央に高翔せる想あり。午後三時、遂にダージリンに著す。

ダージリンは舊シキム王國の領地なりき。六十五年前、シキム英國の保護に歸す。ダージリンの人口一萬餘、西藏、ブータン、英領印度、ニポール等に接し、特に西藏なる世界の祕密藏を開く南方の關門なり。ヒマラヤ山脈中、第二の高峰キンチンジャンガより、直線四十五哩の距離にある一山脈の半腹に位す。この地印度總督を始め、印度にある歐洲人が唯一の避暑地なるを以って、人口年年に增加し行けり。」

二十六日午前二時半、馬の用意既に成れりときき、倉皇、食を終へて庭前に出づ。ダージリンより東南六哩、タイガーヒルと稱する地あり。最高峰エベレストは、此の地に至りて、始めて壯容を見るを得べし。旭日遙かに印度洋頭に出でて、此の世界至高の大山脈を照らすは、天下無比の大觀と稱せらる。今や數時間の後、此の景に接するかと思へば、恰も絶世の大偉人に謁せんとするときの如き感あり。馬は徐徐として其の深さ、其の廣さ、共に測るべからざる大溪谷に向かへる山腹の石逕を辿る。下弦の月、密雲に隱れて、天地森寂、只蹄聲の戛戛として、太古の森林に反響するを聞くのみ。我れらの騎せる馬は西藏駒と稱するもの、體の小なるに似ず、無比の健馬にして、崎嶇たる山道に馴れ、よく一萬九

千呎の高處まで雪を踏みて登り去るといふ。平生騎行に馴れざる我れは、馬の岩石に蹶く毎に馬背よりなげ出されんとして、屢心膽を寒うせり。五時、タイガーヒルに達す。憾むべし、陰雲四合して微雪霏霏たり。眼前に横たはれるキンチンジャンガの大連嶺すら、雲の紗を隔てて僅かに其の彷彿を認むるのみ。一行馬を下り樹枝を焚いて暖を取り、待つこと一時、天已に明けて雪愈甚だし。望を失うて歸途につき、更に明朝の再訪を期す。

二十七日午前二時、徒歩雪を蹈んで發す。昨日騎行の危に懲りしなり。四時半、タイガーヒルに達す。此の地、近きは二三十哩、遠きは百哩、四方唯大山脈の限りなく連なれるを見るのみ。東南の一角、やや低くして打開けたるあり。此の一大パノラマ中に收めらるる連嶺、一萬呎以上のもの

二十五、その二萬呎以上のもの十にして、エベレストは西南方にあり、キンチンジャンガは北方にあり。千山萬岳、此の兩大峰の中間及び前後を點綴す。

天將に曙ならんとす。白雲徐徐に山脚に收まり、連山悉く天を摩する一大黑塊たり。忽ち見る當面のキンチンジャンガ、其の絶巓、紫色に變じ、一道の紫光、吾人の眼を眩せんとするを。蓋しベンガル大平原の地平線に出でたる旭光の、先づ其の頂きを照らせるなり。其の時、山は其の上部紫色に、中間は黑塊、下部は白雲の大海なり。暫くにして、上部の紫は淡紅に、腰部の黑塊は紫となり、又暫くにして、淡紅は琥珀又は黃金色となり、紫色は淡紅に變じ、遂に全山紅色を帶びたる銀世界となる。一秒又一秒、一分又一分、日いよいよ出でて變化いよいよ甚だしく、距離の遠近に從ひ、峰より峰、

山脈より山脈に、其の變化の傳はり行きて、赤きもの、紫なるもの、金の如きもの、銀の如きもの、一時に眼界に映じ來たる。連嶺、悉く旭光に浴せる時、猶背後に一大黑峰の、屹然として立てるを見る。蓋しこれ百七哩の距離を有せるエベレスト峰の、猶太陽を迎へざるが爲なり。待つこと數分時、紫金の光輝數條、エベレストの頂より爛として群山を照らす。此の時、連峰悉く紅色となりて、獨りエベレストの紫なるを見るのみ。

ああ、壯嚴か、雄麗か、此の時、此の際、人はただ恍然として一種異樣の感に打たれ、其の景其の情と共に言慮の外にあり。到底筆舌の形容を許さざるところ、恐らくは千古の大詩人が畢生の心血を注ぐとも、此の宇宙無比の大觀に對しては、其の萬分の一をも描出し難からん。

恍惚として立つこと一時餘、予れと同じく此の景に對し、只時時嘆聲を漏らし居たる男女八名の英人は、此の時世界第一の高山と此の絶大の壯觀とに接したる喜に堪へずとて、タイガーヒルの頂上に舞蹈を始めぬ。九時半、ホテルに歸り、夜來の疲勞を醫せんがため、暫く寢に就く。世界探檢に據る

七　格言十則

千丈の堤も蟻の穴より潰ゆ。韓非子

好事門を出でず、惡事千里に傳ふ。事文類聚

善く游ぐ者は溺れ、善く騎る者は墮つ。淮南子

仰げばいよいよ高く、鑽ればいよいよ堅し。論語

貧賤の友は忘るべからず、糟糠の妻は堂より下さず。後漢書

男子は當に死中に活を求むべし、坐して窮すべけんや。後漢書

水至って清ければ魚なし、人至って察なれば徒なし。漢書

知れるを知れりとし、知らざるを知らずとせよ、是れ知れるなり。論語

鷦鷯深林に巣くふも一枝に過ぎず、偃鼠河に飲むも滿腹に過ぎず。莊子

良賈は深く藏して虛しきがごとく、君子は盛德あって容貌愚なるがごとし。史記

八　源頼朝を論ず

新井白石

按ずるに、頼朝が行家、義經を誅せんとすること甚だいはれなし。初め頼朝、鎌倉に入りしより、既に自家を經營する志あり。されば、東國の豪家を故なく誅滅し、また義廣と戰ひ、義仲をうたんとせし類、悉く皆己れに害あらんことをはかればなり。平氏の暴逆を誅せんよしを稱すといへども、兵を擧げてより四

年が間、一騎をして西せしめず。富士河の戰も、彼れ來たれるが故に、應ぜしものなり、西征の師とはみえず。東國の郡郷をほしきままに押領して、己れに功あるものに割き與ふ。いかで是れを朝憲を重くすといふべき。

義仲をうちしも、かれすでに京に入りて平氏を追ひ落とし、朝賞に預かりしを惡みしが故なり。然るに、義經その心を得ずして、院中に伺候して、朝賞に預かる。かつ其の兵を用ふる方、天下に雙なかりしは、最も賴朝が忌み思ふ所なり。されば、賴朝常に彼れが

兵權をうばひて、其の勢を孤にして、平氏の滅びしのちに、これを摧くにたやすからんことをはかれり。

源頼朝
（山城高雄神護寺藏）

賴朝、みづから朝に二心あるゆゑに、朝に志あるものを忌めるなり。義經は、己が弟なりといへども、當時すでに朝臣に列して京師の鎭護たり。然るにこれを輦轂の下に襲ひ殺さんとす。こ

れ豈、臣たるもののしわざならんや。

上皇の暗弱なるを利して、行家、義経が事を以ってこれをおびやかし奉るに、前に木曾と平氏とを滅ししは功あるに誇れり。はじめに平氏の兵威を摧きしは義仲が功なり、終りに平氏を亡ししは義経が功多しといひつべし。義仲を誅せしことは法住寺殿を攻め奉りし罪を問ひしにはあらず、東軍の京に入りし時、たまたまかれが凶悪の日にあひしなり。頼朝、朝の御爲に彼れを討ちしといふは、いつはれるなり。」

或はおもへらく「義経終に頼朝にそむきたり。さらば、頼朝のかれを誅せんとせし事、理りともいふべし」と。しかるにはあらず。義経、はじめより頼朝に二心なし、ただ頼朝の姦計ある事を知らず、いにしへの頼光、頼親、頼信がごとく、義家、義綱、義光が如く、兄弟ともに朝の御守りたるべしとのみ思ひて、頼朝の代官として義仲をうち、平家をやぶりし後、京師を守護して院中に伺候せるなり。然るに、頼朝不快の氣色ありしかば、いかにもして、其の心をとらんとおもひき。されば、範頼が平氏をやぶる事のかなはざるに及びて、義経の讃岐にむかひし時、渡邊にて、風あらく波高

きに、眞先に船を出だす。大藏卿泰經これを諫めしに「義經ことに存念あり、一陣において、命をすてんとおもふ」といひき。その志もし此の度の軍に勝つことを得ずば、最初に討死すべし。もし勝つことを得ば、頼朝が心も和ぎなんや」と思ひしにあらずや。かくまでに、頼朝がために心を盡くしぬれど、頼朝、更によしと思ふ心もなく、平氏亡びし日、すみやかに其の兵權を奪ひて、召し還す。此の後、數通の起請文を以って、二心なきよしを申しかども、さらにゆるさずつひに討手をさしむけたり。此の時、義經、みづから首刎ねて、その年頃の志をあらはさんには、いさしらず、その餘は、自ら死を救ふ謀を出ださんにはしかじ。義經、院宣を申し請けし事、やむことを得ざるに出でたり。其の志の如きは、あはれむべし。

ある人、またおもへらく「義經、其の志驕りて、勇を恃みき。みづから其の禍をとれり。加ふるに景時が讒を以ってす」といふ。これも、また頼朝に黨する説なり。範頼が愿にして怯なるも、つひに死をまぬかれず。その死せしとき、誰れか彼れを讒したる。おもふに、ただ頼朝がごときものの弟たらんこと、最も難

しとこそいふべけれ。讀史餘論

○ 良友

中村正直

友も亦類多し。勢利の友あり、貨財の友あり、歡樂の友あり、功名の友あり、これらは良友といふべからず。良友は眞友にして、僞友にあらず。以上の友は勢利、貨財、歡樂、功名を以って一時相合ふものに過ぎず。譬へば、屍のある處に鴉の集まるごとく、羶臭のある處に蠅蚋の集まるごとく、穀のある處に鼠の集まるが如し。屍肉盡くれば烏鴉散じ、羶臭盡くれば蠅蚋去り、穀盡くれば鼠去る。是の故に、勢利の友は爾に權力勢位あれば、擾擾として來たり、權勢あらん限りは附從すべし。若し權勢去らば、この友やまた爾を顧みじ。

貨財の友は爾に金銀貨財あらば、續續として來たり、世富のあらんかぎり屬從すべし。世富去らば、この友やまた爾と相干からじ。功名の友は、功名を同じく分かたんとする間は、手足の如く、腹心の如し。その功名既に得るに及んでは、往往競うて互に他の上たらんとして、或は[illegible]して相視るに至る。この友は始や暫く友にして、終はりにはまた敵となること多し。歡樂の友、その風流相與にし、花月同じく賞するは、沈湎佚樂には勝るべけれど、要するに一時に過ぎず、興味盡くれば情好亦盡くるなり。

夫れ、眞友は爾の心と交はるものにして、爾の形に交はるにあらず。心は神物なり、財貨權力等は形物なり。爾の心は爾と一生俱に在り。爾の財貨權力は虛浮の物なり、儻來の物なり、時に來たり、時に去り、或は有り、或は無し。爾の心に

は神智あり、神德あり。藝文に通じ、技巧に習ひ、學識の廣きは、爾の神智に由るなり、天道を敬し、眞理を愛し、人類を惠憐し、善事を行ふを好むは、爾の神德に由るなり。爾若し富千金を累ぬるや爾の神智毫末を加へず、爾若し貴萬乘を極むるや爾の神德微塵も增さず、爾若し刑苦戮辱に遇ふや爾の神智一聲をも失はず、爾若し貧賤艱厄を受くるや爾の神德一點を減ぜず。爾の心、爾と一生俱にあるのみならず、爾の心は死すとも朽ちざるものなり。この心と心と相知り、相親しむ者を良友といふ、即ち眞

中村正直（寫眞）

友なり。

この眞友は形を以って交はらず、從って、形物の去來を以って友誼の厚薄を爲さず。故にこの眞友なるもの一たび相合ふや、神智は互に相資益するを務め、神德は互に相勸勉するを求め、共に斯の世に在るや、已れを益し、人を利し、斯の世を去るとも誓って相離るることなし。嗚呼、この友は共に一世の富貴を受くべく、共に一世の貧賤に居るべく、共に萬世の富貴を受くべく、共に萬世の貧賤を免るべし。說いてここに至れば、當に知るべし、かくの如き良友を得るは貨財權勢の形物を得るに勝るべきを。「世の富は良友より大いなるは無し」といへること、豈信ならずや

然りと雖も、我れはこの說を終はるに臨みて、一轉語を下さんと欲す。爾或は將に曰はむとす「我れに良友なし」と。夫

れ、友は鏡にある面影の如し、顔美なれば、鏡中の影亦必ず美なり。故に、爾若し良友を得んと欲せば、爾自ら他人の良友となるべし。爾若し他人の良友とならば、良友に於いて何の得がたきことかあらん。然らずして良友なきを嘆ずるは、恰も己れが顔の醜を問はずして、鏡中の影の美ならざるを咎むるが如し、謬れりといふべし。文學雜誌

九　室鳩巣を見舞ふ書

新井白石

昨日の御報拜誦、驚愕是非に及ばず候。然りといへども、火急の處に御全家御異狀なき事をこの上の多幸と思し召さるべく候。當時御寓居藩府の中、御遠

慮いかにも御尤に存ぜられ候。但し常の時と違ひたる事にも候、只今の事に候間、なかなか少しも御容身ほどの處も得難くこれあるべく候か。須臾御覽合はせられて御身を寄せられ候方を、同じながら御心靜かに御求め然るべき事に候。これより行くさきの事は、かならずかならず天命に御任せ、とかくと御思惟に及ぶまじき事に候。進止行藏もとより期しがたき事のみに候。

唯唯惜しむべき事は、多年御拮据候うて御求め得し御書籍と御手錄ものとの事、承り候だに心を苦しめ

候。しかし、これも身より外のもの、是非に及ばず候。貴兄既に御學業も成就候へば、之れより後、書籍を賴みて賴まぬ事に候。令郎未だ御學問未成業の御事に候へば、せめて書籍をば御殘し候御謀らひごと、強ちに俗輩、買田問舍等の事に比すべからず候。某家藏の書もとより多からず候へども、二重になり候もの少少これあり候。書目の簿もなにの内にやらん入れおき候故、昨夜尋ね候へども知れず候、覺え候處は監本四書、茅鹿門史記、漢書などこれあり候。乃ち令郎へこれを進ずべく候。この外の書、恩賜の物の外は、何にても御用次第御貸し申すべく候、御事かかすまじく候。

この節、手前の事御物語申し候通り故に、僅かの御用にも立ち候はぬ事口惜しく候へども、力なく候。御上著などこれなく候はんか、その段は恩賜のものなほこれあるべく候、必ず御心おきなく仰せ下さるべく候。廉潔を立て候も事にもより、相手にもより候。尋常同門も兄弟の親に同じく候。況やただに同門と申すばかりにもこれなく、秦風に「與子同袍」と申すはこの事に候。仰せ下さるる、少しも少しも御はづ

かしかるべき事にもなく候。必ず必ず子子たる小丈夫の如く、また匹夫匹婦溝瀆に縊れ候如き事は吾が儕あるまじき事に候。

土肥生事もともとより貧困のうへ、かくの如き事、御察しなさるべく候。深見翁事も何やかや焼失、これまた居所に惑はれしことに候。錦里文庫は存じ候由承知せめてもの事に存じ候。これも麹町邊へ借宅あるべき由に候。

それに今暫く御滞留候はば、何卒小舟になりとも、辻駕籠になりとも、御乗り候うて、深川一色町と御尋ね御出でなさるまじく候や、一向に相談じたきことのみに候。返す返すそのもと御引き離れは旬日の間なほ御猶豫のかた、ましし候はんかと存じ候。貴報に及ばず候。以上。

なほなほ貴報下され候はば、舊宅へ下さるべく候。今迄の屋敷望みの人も候はば、早早御貸し然るべく候。新室手簡

十　門生に諭す　室鳩巣

諸君のごときは、春秋に富み、材力にたる。もし懈ら

ずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。然れども、歳月は恃むに足らず、材力は多とするに足らず、ただ孳孳汲汲として勉めて息まざるにありぬべし。もし悠悠として日を渕り、一旦年老い齢傾きて後、日頃の懈を思ひ出でていかに悔ゆとも、何の益かあるべき。即ち今翁が身の上にて候ふ。されば、古詩にも、

少壯不努力、老大徒傷悲。

といひ、陶淵明も、

盛年不重來、一日難再晨。及時當勉勵、歳月不待人。

といへば、古人も此の感懷を同じうすとぞ見えし。これらの詩句、時時吟詠して勇進の氣を振るひ起こすべし。又世に傳ふる朱文公の勸學の文に、

勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。日月逝矣、歳不我延。嗚呼老矣、是誰之愆。

此の文、本集に見えず。朱子家訓の文などの類にて、朱子の少作か、又は後人の擬作にて、名を朱子に託せるにてもあらんか。よし、誰れの作にもせよ、言簡にして意も明白なり。をりふし打ち誦じて自ら警むるによかるべし。

それよりも翁が常に愛するは陶侃が語なり。

大禹聖人、乃惜寸陰。至於衆人、當惜分陰。豈可佚遊荒廢、生無益於時、死無聞於後、是自棄也。

といへるこそ學者志を立つる法とすべきなれ。前にいへる淵明が詩も、曩祖以來の家法にこそと思ひ侍り。およそ、人と生まれて學に志ありといふきはの、生きて時に益なく、死して後に聞こゆることなく、草木と同じく朽ち果てんは、いと口惜しかるべきことなり。されば、諸君もこの陶侃が語をもて自ら激して、日夜勤勉せらるべし。

但し、學は勇進を喜ぶといへども、又急迫なるを嫌ひ侍り。とかく一生ここを離れぬことにて候へば、急迫にして求むべきにあらず、ただ懈惰を戒めて、常に聖賢の書に優遊涵泳せられなば、久しうして自ら進益あるべし。翁、昔、加賀にありしとき、士族の中に紹鷗、利休が風流を慕ひて茶湯を好むものあり。江戸へ行役するとき、道中茶具を持して、逆旅にても釜を

室鳩巣（肖像集）

かけ炭をおきて樂しみとしけるを、同行の人見て「いかにすけばとて、道中にてはやめよかし」といへば、その人いふは「道中の日とて一生の外にあらばこそ、これも一生の日數の内なれば、わが茶湯をする日にあらずといふことなし。家にあると何ぞ異ならん」とて、その後もやめざりき。學者の道に志すも、この人の茶湯を好むがごとくなるべし。

もとより、道は須臾も離るべからざれば、一生の間、道を行ふ日にあらざるはなく、あふさきるさ、道のある所にあらざるはなし。しかるを、急迫にしてもとめ

ば、僅僅の得ることありとも、皮膚の間にてやみなん。いかでその肉をかんで滋味にあくことあるべき。況や急迫なれば、久しきに耐へぬものぞかし。いまだその時に及ばずして、やがて倦怠するに至りなん。翁おもへらく、學問は勉勵を要とす、ただ急にして迫切なるを恐る。義理は涵泳を貴ぶ、緩にして懈弛なるを戒む。迫切ならず、懈弛ならずば、學者進修の道に於いて、緩急相得て背かざるに近かるべし」。程子の曰はく、

志道懇切、固是誠意。若迫切不中、理則反爲不誠。

と。又曰はく、

人謂ふ要は力行、亦只是淺近語。這一點意氣、能得幾時了。

と。諸君、程子の言を見よ、翁が言あたらずといふとも、遠からじ。駿臺雜話

○ ペスタロッチを論ず

澤柳政太郎

今茲明治二十九年を距ること正に百五十年、佛にはルソーの如き、ナポレオンの如きあり、獨にはフィヒテの如き、ゲーテの如きあり、政治界、思想界、及び文學界に立ちて燦然光輝を放てる時代に當たりて、山紫水明風光秀麗なる瑞西も、亦教育界に一大人物を產して世界に大恩惠を給與したりき。嗚呼、是れ誰れぞ、ヘンリー、ペスタロッチ即ち其の人なり。」

渠れは悍鷙に似て又家鳩の如く、猛獸に似て又山羊の如く、大人に似てまた小兒の如く、勇は以って鬼神を欺くべく、愛は以って嬰兒を懷くべく、柔中に剛あり、剛中に柔あり、多面多角、不可思議の賦性を有し、政治問題にまれ、社會問題にまれ、はた教育問題にまれ、苟も人類の位置を高むる事に關して必要なるものならんには、凡て之れを攻究精思して餘力を遺さず、遂に教育史上一頭地を抽きんでて、百年後の今日尙赫赫の名聲を擅にす。渠れも亦偉人と謂ふべきかな。」

曾てペスタロッチの學生にして、後に有名なる歷史家となりたるフルリーミンは、親戚及び故舊のためとて著はしたる其の幼時の回顧錄に記して曰はく、

渠れの頭には粗豪にして逆立ちたる毛髪を戴き、面には數多の痘痕を印し、かつ黄なる斑點は其の全部を蔽ひ、汚れたる鬚髯は長く尖りて芒刺の如く、極めて醜き人にてありき。又渠れの頸には絶えて襟飾を纏ひしことなく、足に著けたるは不恰好なる袴、弊れたる靴下及び巨大なる靴のみなりき。しかのみならず、其の歩みざまは正整ならず、其の眼は大いにして輝くこともあり、或は窪み落ちて半ば閉ぢたることもあり、其の顔色は或は深き悲しみを包みたるが如く、或は平和の波を湛へたるが如し。其の語る時は忽ちにして緩く且音樂的に、忽

ペスタロッチ（寫眞）

ちにして急に且迅雷の如くなりき。諸子はかくて予れらが曾て「父」と呼びたる其の人の面影を見ることを得たらん。

渠れの容貌風采は前の如し。然らば其の才藻學藝はいかに。渠れ曾てブルグドルフの公立學校に奉職せんことを願ひしことあり。チャールス、モンナードは此の時に於ける渠れを評して云はく、

此の時に於いてはブルグドルフの有司は一小學校と雖も、之れをペスタロッチに委任することを敢へてせざりしなるべし。此の人や後にこそ世界を動かすほどの大名を揚げたれ、此の時に於いては極めて庸劣なる教員候補者にだに頡頏することを得ざりしならん。渠れは萬事に短所多かりき。其の言語の濁りて不明なる、其の習

字に拙劣なる、其の圖畫を全く能くせざる、はた、文法を無視したる、一も長ずる所あるにあらず。渠れは博物學中の種種なる學科を學びたれども、其の分類法又は名稱などには特に注意する所あらざりき。渠れは又通常の計算には熟達したりしかど、乘算又は除算の稍錯綜せる者に至りては大いに苦しみしなるべく、又幾何問題の如きは恐らくは曾て解釋を試みしことだにあらざるべし。然れども、其の膝下に養はれたる幾多の貧兒をして、之れを呼んで父と云はしめたるものは豈渠れにあらずや。其の事業を共にせし多數の補助者をして、如何なる事に遭ふも曾て渠れに離るるに忍びざらしめたるものも亦渠れにあらずや。乃ち知る、渠れは決して平平凡凡を以って目すべき人物にあらざることを。況や其の才幹力量の少且短なるにも拘らず、ノイホフ、スタンツ、ブルグドルフ、イフェルダン等、到る處に千艱を凌ぎ萬難を排し、屢偉大の効果を奏して人の耳目を驚かしたるが如きことあるに於いてをや。況や又不朽の眞理を發見して教育史上優に一頭地を抽きんで、遙かに後世を麾くが如き概あるに於いてをや。ここに至りて誰れか復渠れを目して哲人にあらず、偉人にあらずと斷言するを敢へてし得る者あらん。

因りて疑ふ、渠れをして此の高尚なる地位に進ましめたるもの、果たして何くにか在ると。顧ふに、諸君は固より之れに答ふる所以を知るなるべし。請ふ、一言以って之れを蔽はん、云はく「堅硬なること石の如く、玲瓏なること玉の如き心操、即ち儒家の謂はゆる仁、聖徒の謂はゆる愛、佛徒の謂はゆる慈悲心、是れ即ち渠れが本領特質なり」と。蓋し抑揚あ

り、頓挫あり、又波瀾ある渠れが畢生の事業は、其の根源を此の心操即ち貧民に對する憐愍の一念に發すればなり。渠れをして墮落せる小兒と接觸することを厭はざらしめたるものも此の一念なり、渠れをして疾病ある小兒と同衾することを辭せざらしめたるものも亦此の一念なり。或は神學家たらしめ、教育家たらしめ、困苦極めざるなく、辛酸嘗めざるなく、以って光澤あり色彩ある其の全生涯の歴史を織り成さしめたるもの、凡て此の一念の然らしむる所ならずんばあらず。若し夫れ渠れよりして此の一念を奪ひ去らんか、恰も是れ生きたる木偶に過ぎざるのみ、生命なき肉塊の如きのみ。要するに貧民の不幸を憐む一念こそ、是れ眞に渠れが生命なれ、骨髄なれ。其の熱心の如き、其の忍耐の如き、其の愛情の如き、はた其の忘我の如き、苟も美を極め

善を盡くし、以って人を聳動せしめたる程の諸德は、皆此の根本的一念の、時に隨ひ處に應じて名を變へ形を異にしたるものに過ぎず。

予は唯薄弱なる一老翁のみ。予が知識には無量の闕點あり、且予が知力は比較的に小なり。然れども萬事に於いて予が意志の、予が利己心のために支配せられざるは恐らくは予が唯一の特質ならんか。

と。渠れが忘我の德に富みしは、其の生涯の歴史明かに之れを證せり。蓋し渠れが一代は殆ど忘我の痕跡なり。其の熱心の如き、其の忍耐の如き、例を擧げ、證を求めなば、其の煩に堪へざらんとす。然れども、此れらの事實は、苟も其の傳を繙かん者の皆能く知る所、吾人復何をか贅せん。吾人は思ふ「天下の廣き、人物の多き、目して偉人となすべき者何ぞ

限らん、然れども渠れの如く熱心に、渠れの如く忍耐に、渠れの如く慈愛に、はた渠れの如く忘我の德を備ふる者、天下廣しと雖も、人物多しと雖も、果たして幾人かある。渠れは容貌風采の點に於いて已に衆に劣れり、才藻學藝の點に於いても亦人に下れり。然れども、此れら諸德の完全且偉大なるに至りては、類を絶ち群を超えて鳧かに一頭地を抽きんづるものなり」と。嗚呼、ペスタロッチをしてペスタロッチたらしめたるものは蓋しこの裡にあらんか。ペスタロッチ

十一　笠置の御没落

作者未詳

さる程に、類火東西より吹かれて、餘烟皇居にかかりければ、主上を始め參らせて、宮宮卿相雲客みなかち

跣なる體にて、いづくを指すともなく足に任せて落ち行き給ふ。此の人人、始め一二町が程こそ主上を扶け參らせて前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈しく道暗うして、敵の鬨の聲ここかしこに聞こえければ、次第にわかれわかれになりて、後には只藤房、季房二人より外は、主上の御手を引き參らする人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に變へさせ給ひて、そこともしらず迷ひ出でさせ給ひける御有樣こそあさましけれ。いかにもして夜の中に赤坂の城へと、御心ばかりを盡くされけれども、假

にも未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心ちして、一足には休み、二足には立ち止まり、晝は道の傍なる青塚の陰に御身を隠させ給ひて寒草の蹤かなるを御座の褥とし、夜は人も通はぬ野原の露分け迷はせ給ひて、羅穀の御袖をほしあへず。とかうして、夜晝三日に山城の多賀郷なる有王山の麓まで落ちさせ給ひてけり。

藤房も季房も三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ身疲れて、今はいかなるめにあふとも逃れぬべき心ちせざりければ、せん方なくて幽谷の岩を枕にて君臣兄弟諸共に現の夢に臥し給ふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るかと聞こしめされて木の陰に立ち寄らせ給ひたれば、下露のはらはらと御袖にかかりけるを、主上御覽ぜられて、

さして行く笠置の山を出でしより、
あめが下には隱れがもなし。

藤房卿涙をおさへて、

いかにせん、頼む陰とて立ち寄れば、
なほ袖濡らす松のしたつゆ。

山城の國の住人深須入道、松井藏人二人、此の邊の案

内者なりければ、山山峯峯殘る所なく搜しける間、皇居隱れなく尋ね出だされ給ふ。主上誠に怖ろしげなる御氣色にて「汝ら心ある者ならば、天恩を戴いて私の榮華を期せよ」と仰せられければ、さし

もの深須入道俄かに心變じて「あはれ、此の君を隱し奉って義兵を擧げばや」と思ひけれども、あとにつづける松井が所存知り難かりける間、事の漏れ易くして道の成り難からん事をはかりてもだしけるこそうたてけれ。俄かの事にて綱代の輿だになければ、張輿の怪しげなるに扶け乘せ參らせて、まづ南都の內山へ入れ奉る。其の體、只、殷湯、夏臺に囚はれ、越王、會稽に降せし昔の夢に異ならず。是れを見る人ごとに袖をぬらさずといふ事なかりけり。

十月二日、六波羅の北方常葉、駿河守範貞三千餘騎に

警固

龍顔

繼体

内侍所

て路を警固仕りて、主上を宇治の平等院へ成し奉る。其の日、關東の兩大將、京へは入らずして、すぐに宇治へ參り向かうて龍顔に謁し奉り、まづ三種の神器を渡し給はって持明院新帝へまゐらすべき由を奏聞す。主上、藤房を以って仰せ出だされけるは「三種の神器は、古より繼體の君、位を天に受けさせ給ふ時、自ら是れを授け奉るものなり。四海に威を振ふ逆臣あって暫く天下を掌に握るものありといへども、未だその三種の重器を自らほしいままにして新帝に渡し奉る例を聞かず。その上、内侍所をば笠置の本

龍駕の御事

堂に捨て置き奉りしかば、定めて戰場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ。神璽は山中に迷ひし時、木の枝に懸け置きしかば、遂にはよも吾が國の守とならせ給はぬ事あらじ。寶劍は武家の輩もし天罰を顧みずして玉體に近づき奉ることあらば、自らその刃の上に伏させ給はんずるために、暫くも御身を放たるる事あるまじきなり」と仰せられければ、東使兩人も六波羅もことばなくして退出す。

翌日に龍駕を廻らして六波羅へ成し參らせんとしけるを、前前臨幸の儀式ならでは還幸なるまじき由

を強ひて仰せ出だされける間、力なく鳳輦を用意し衮衣を調進しける間、三日まで平等院に逗留あって（衮衣）ぞ六波羅へは入らせ給ひける。日來の行幸に事かはりて鳳輦は數萬の武士に打ち圍まれ、月卿雲客は怪しげなる籠輿、傳馬に扶け乘せられて、七條を東へ、河原を上りに、六波羅へと急がせ給へば、見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ。悲しいかな、昨日は紫宸北極の高きに坐して百司禮義の装をつくろひしに、今は白屋東夷の卑しきに下らせ給ひて萬卒守禦の嚴しきに御心を惱まさる。時移り事去り、樂しみ盡きて哀しみ來たる、天上の五衰、人間の一炊ただ夢かとのみぞ覺えたる。遠からぬ雲の上の御住居、いつしか思しめし出だす御事多きをりふし、時雨の雨一通り軒端の月に過ぎけるを聞こしめして、

住み馴れぬ板屋の軒のむらしぐれ、
音をきくにも袖はぬれけり。

四五日ありて、中宮の御方より御琵琶を遣はさるるに、御文あり。御覽ずれば、

思ひやれ、塵のみ積もる四つの緒に
はらひもあへずかかる涙を。

引き返して御返事ありけるに、

涙ゆゑ半ばの月はくもるとも、
　共にみし夜のかげは忘れじ。太平記

十二　大塔宮の熊野落

作者未詳

大塔宮二品親王は笠置の城の安否を聞こし召されん爲に、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城已に落ちて主上囚はれさせ給ひぬと聞こえしかば、虎の尾を履む恐、御身の上に迫りて、天地廣しといへども御身を隱さるべき所なし。日月明かなりといへども長夜に迷へるここちして、晝は野原の草に隱れて、露に臥す鶉の床に御涙を爭ひ、夜は孤村の辻に彳みて、人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、何くとても御心安かるべき處なかりければ、かくても暫しはと、おぼしめされける處に、一乘院の候人、按察法眼好專、如何して聞きたりけん、五百餘騎を率ゐて、未明に般若寺へぞ寄せたりける。

折節、宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防ぎ防ぎて落ちさせ給ふべき樣もなかりける上、透間もなく兵已に寺内に打ち入りたれば、紛れて御出あ

るべき方もなし。さらばよし、自害せん」と、おぼしめして、既におしはだ脱がせ給ひたりけるが「事叶はざらん期に臨んで腹を切らん事は、いと易かるべし。若しやと、隠れて見ばや」と、おぼしめし返して、佛殿の方を御覽ずるに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり、二つの櫃は未だ蓋をあけず、一つの櫃は御經を半ばすぎとり出だして、蓋をもせざりけり。此の蓋を明けたる櫃の中へ、御身を縮めて臥させ給ひ、其の上に御經をひきかづきて、隠形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。若し捜し出だされなば、

やがて突き立てんとおぼしめして、氷の如くなる刀を拔いて、御腹にさし當て、兵「ここにこそ」と云はんずる一言を待たせ給ひける御心の中推し量るも尚淺かるべし。

さるほどに、兵、佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも、殘る所なく捜しけるが、餘りに求めかねて「是れ體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃を開けて見よ」とて、蓋したる櫃二つを開けて、御經を取り出だし、底を翻して見けれども、おはせず。「蓋開けたる櫃は、見るまでもなし」とて、兵皆寺中を出て去りぬ。宮

は不思議の御命を續がせ給ひ、夢に道行くここちして、櫃の中におはしけるが、若し又兵の立ち歸り、委しく搜す事もやあらんずらんと、御思案ありて、やがて、前に兵の搜し見たりつる櫃に、入りかはらせ給ひてぞおはしける。

案の如く、兵共又佛殿に立ち歸り、「前の蓋の開きたるを見ざりつるが覺束なし」とて御經を皆打ち移して見けるが、からからと打ち笑うて、「大般若の櫃の中を能く能く搜したれば、大塔宮はいらせ給はで、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ」と戲れければ、兵皆一同に

笑ひて、門外へぞ出でにける。「是れ偏に摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護による命なり」と、信心肝に銘じ、感涙御袖を潤せり。

かくては、南都邊の御隱れがも叶ひ難ければ、則ち般若寺を御出であって、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には、光林坊玄尊、赤松律師則祐、木寺相模、岡本三河房、武藏房、村上彥四郎、片岡八郎、矢田彥七、平賀三郎、彼れ此れ以上九人也。宮を始め奉って、御供の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半にせめ、其の中に年長ぜるを先達に作り立て、田舍山伏の熊

野參詣する體にぞ見せたりける。此の君固より龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めて叶はせ給はじと、御伴の人人かねて心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮脚巾草鞋をめして、少しも草臥れたる御氣色もなく、社社の奉幣、宿宿の御勤懈らせ給はざりければ、路次に行き合ひける道者も、勤修を積める先達も、見尤むることなかりけり。

由良の湊を見渡せば、沖漕ぐ舟の楫をたえ、浦の濱ゆ

ふ幾重とも知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺渺と、薄紫や藤代の松にかかれる磯の浪、和歌、吹上をよそに見て、月にみがける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨をふくめる孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王子に著きたまふ。

其の夜は叢祠の露に御袖を片敷いて、夜もすがら祈り申させ給ひけり。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと神慮も暗に測られたり。終夜の禮拜に、御窮屈ありければ、御脇を曲げて枕として、暫く御ま

どろみありける御夢に、髻結うたる童子一人來て、「熊野三山の間は、尚も人の心不和にして、大義なり難し。是れより十津川の方へ御渡り候ひて、時の至らんを御待ち候へかし。　兩所權現より案内者に附け進らせられて候へば、御道指南仕るべく候ふ」と申すと、御覽ぜられて、御夢は則ち覺めにけり。　是れ權現の御告げなりけりと、憑もしくおぼしめされければ、未明に御よろこびの奉幣を捧げ、やがて十津川を尋ねて、ぞ分け入らせ給ひける。

其の道のほど三十里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峰の雲に枕を敧て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍んで、朽ちたる橋に肝を消す。　見上山路固より雨なくして空翠つねに衣を濕す。　見上ぐれば萬仞の青壁劍に削り、見下ろせば千丈の碧潭藍に染めり。　數日の間かかる嶮難を經させ給へば、御身も草臥れはてて、流るる汗水の如く、御足は缺け損じて、草鞋皆血に染まれり。　御供の人人も、皆其の身鐵石にあらざれば、皆飢ゑ疲れて、はかばかしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路のほど十三日に、十津川へぞ著かせ給ひける。太平記

○ をしへ子に戒む

本居宣長

吾れに從ひて物學ばんともがらよ、わが後にまたよき考のいで來たらんには、必ずわが說にな泥みそ。わが惡しきゆゑをいひてよき考をひろめよ。すべておのが人を敎ふるは、道を明かにせんとなれば、とにもかくにも道を明かにせんぞ吾れを用ふるにはありける。道を思はでいたづらに吾れを貴まんは、わが心にあらざるぞかし。玉勝間

本居宣長
（本居氏藏）

十三　星と花

土井晩翠

おなじ自然の
御手に育ちし
みそらの花を
わがよの星を
かれとこれとに
にほひはおなじ、
笑みと光を
かはすもやさし、
されば、あけぼの

おんなじ母の
姉と妹、
星といひ、
花といふ。」
隔たれど、
星と花。
宵宵に
花と星。」
雲白く、

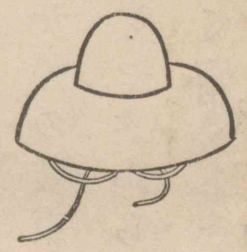
御空の花の　しぼむとき、
見よ、白露の　ひとしづく、
わがよの星に　涙あり。」天地有情

十四　長谷部信連　作者未詳

さる程に、宮は五月十五夜の雲間の月を詠めさせ給ひて、何の行方も思し召しよらざりけるに、三位入道の使者とて、文持ちていそがはしげに出できたる。宮の御乳母子、六條佐、大夫宗信これを取りて、御前へ参り、開いて見るに「君の御企すでに顕れさせ給ひて、土佐の畑へ移しまゐらすべしとて、官人どもが別當宣を承りて、御迎に参り候ふ。急ぎ御所を出でさせ給ひて、三井寺へ入らせおはしませ。入道もやがて参り候はん」とぞ書かれたる。

宮は、此の事如何せんと、思し召し煩はせ給ふ處に、宮の侍に、長兵衛尉長谷部信連といふ者あり。折節、御前近く候ひけるが、進み出でて申しけるは「ただ何のやうも候ふまじ。女房の装束に出で立たせ給ひて、落ちさせ給ふべくもや候ふらん」と、申しければ「此の儀尤も然るべし」とて御ぐしを亂り、重ねたる御衣に、

市女笠をぞ召されける。六條、佐、大夫宗信、傘持ちて御供とへば、青侍が、女を迎へて行くやうに出で立たせ給ひて、高倉を北へ落ちさせ給ふに、大きなる溝のありけるを、いと物輕く越えさせ給へば、道行く人が立ち止って「はしたなの女房の溝越えやうや」とて、怪しげに見まゐらせければ、いとど足早にぞ過ぎさせおはします。

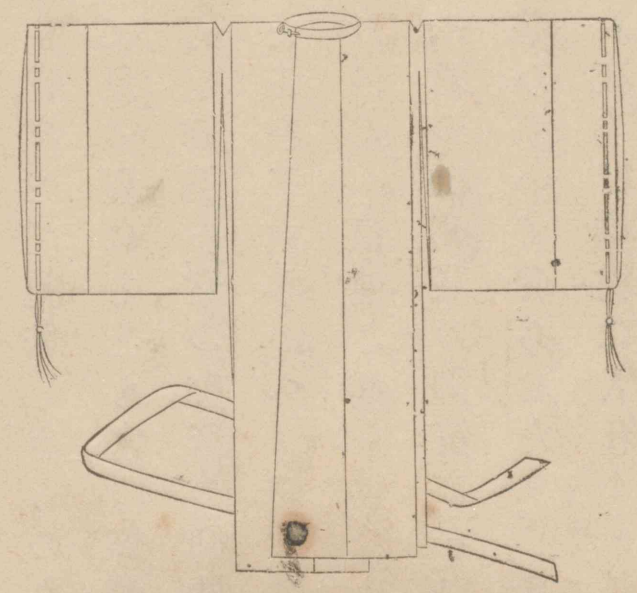


市女笠（貞丈雜記）

御所の御留守には、長兵衞尉長谷部信連をぞ置かれ仕る。鶴丸といふ童、袋に物入れて戴きたり。た

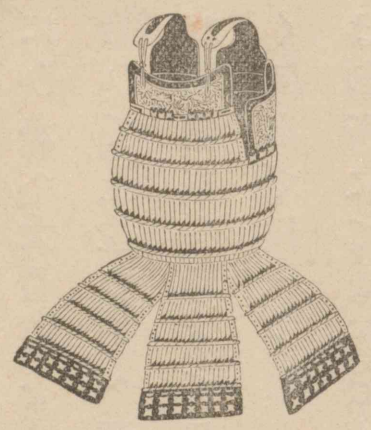
ける。女房達の少少おはしけるをば、彼處此處へ立ち忍ばせて、見苦しきものあらば、取りしたためんと見る程に、さしも宮の御祕藏ありける小枝と聞こえし御笛を、常の御所の御枕に取り忘れさせたまひたるをぞ、立ちかへりても取らまほしくや思し召されけん。信連これを見つけて「あなあさまし。さしも君の御祕藏の御笛を」と申して、今、五町がうちにて追ひ著いて參らせたり。宮斜ならず御感ありて「我れ死なば御棺に入れよ」とぞ仰せける。やがて「御供仕れ」と仰せければ、信連申しけるは「只今あの御所へ、

官人どもが御迎に參り候ふなるに、人一人も候はざらんは、むげに口惜しく存じ候ふ。其の上、あの御所に、信連が候ふと申すことをば、上下、皆、知りたることにてこそ候へ。今夜候はざらんは、それも、其の夜は逃げたりなど、いはれんこと口惜しう候ふべし。弓矢とる身は、かりにも名こそ惜しう



（服色圖解）

候へ。官人どもに暫くあひしらひ、一方打ち破ってやがて參り候はん」とて、只一人取ってかへす。信連が、其の夜の裝束には、薄青の狩衣の下に、萌黄匂の腹巻をきて、衞府の太刀をぞ帶びたりける。三條表の總門をも、高倉表の小門をも、共に開けて待ちかけたり。



腹巻（本朝軍器考）

羽判官光長、都合その勢三百餘騎、十五日の子の刻に、宮の御所へぞ押し寄せたる。源大夫判官は、存ずる案の如く、源大夫判官兼綱、出

旨ありと覺えて、遙かの門外に控へたり。

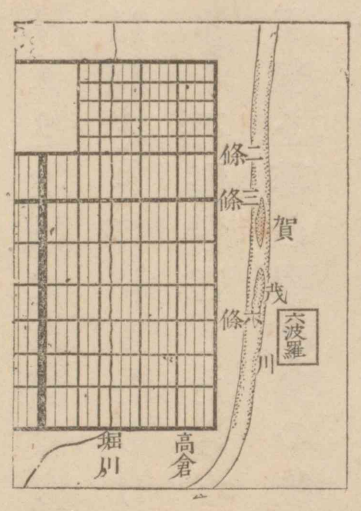
出羽の判官光長は乘りながら門の内へ打ち入れ、庭にひかへ、大音聲をあげて「宮の御企すでに顯れさせ給ひて、土佐の畑へ遷し參らせんがために、官人どもが、別當宣を承りて、只今御迎に參りて候ふ。疾く疾く御出で候へ」と申しければ、信連、大床に立って「當時は御所にても候はず、御物詣にて候ふぞ。何事ぞ、事の子細を申されよ」といひければ、出羽の判官「なんでふ此の御所ならでは、何處へか渡らせ給ふべかんなるぞ。其の儀ならば、下部ども參りて搜し奉れ」と申しける。信連重ねて「物も覺えぬ官人どもが申しやうかな。馬に乘りながら、門の内へ參るだにも奇怪なるに、あまつさへ、下部ども參って搜し奉れとは、いかでか申すぞ。長兵衞尉長谷部の信連が候ふぞ。近く寄りて過ちすな」とぞいひける。

廳の下部のうちに、金武といふ大力の剛の者、打物の鞘をはづし、信連に目をかけて、大床の上へ飛びのぼる。是れを見て、とりれいども、十四五人ぞ續いたる。信連是れを見て、狩衣の帶紐引き切って捨つるままに、衞府の太刀なれども身をば心得て作らせたるを

拔き合はせて、散散にこそ振舞ひたれ。敵は大太刀、長刀にて振舞へども、信連が衞府の太刀に切り立てられて、嵐に木の葉の散るやうに、庭へさっとぞ下りたりける。

五月十五夜の雲間の月の顯れ出でて明かりけるに、敵は無案内なり、信連は案内者にてありければ、あそこの馬道に追ひ懸けては、はたと切り、此所のつまりに追ひつめては、ちょうと切る。「如何に、宣旨の御使をば、かくはするぞ」といひければ「宣旨とは何ぞ」とて、太刀ゆがめば躍りのき、押し直し、踏み直し、矢庭によ

き者ども十四五人ぞ切り伏せたる。その後、太刀の鋒三寸ばかり打ち折れて捨ててけり。腹を切らんと腰をさぐれとも、鞘卷落ちてなかりければ、力及ばず、大手をひろげて、高倉表の小門より跳り出でんとする處に、大長刀持ちたる男一人、寄り合ひたり。信連、長刀に乘らんと飛びてかかるが、乘り損じて、股を縫ひさまに貫かれ、心は猛く思へども、大勢の中に取籠められて、生捕にこそせられけれ。



其の後、御所中に亂れ入りてさがせども、宮は渡らせたまはず。　信連ばかり搦めて、六波羅へ率て參る。

前の右大將宗盛卿、大床に立ちて、信連を大庭に引きすゑさせ「誠に、わ男は、宣旨の御使と名のるを『宣旨とは何ぞ』とて、切りたりけるか。　其の上、廳の下部ども、多く刃傷殺害したるなれば、能く能く糺問して、事の子細を尋ね問ひ、其の後、河原に引き出だして、首を刎ねよ」とぞの給ひける。　信連、もとより勝れたる大剛の者なりければ、居直り、あざ笑って申しけるは「この程、あの御所を、夜な夜な物の窺ひ候ふを、なんでふことのあるべきと、思ひ侮りて、用心も仕らぬ處に、夜半ばかりに、鎧ひたる者どもが、二三百騎打ち入って候ふを『何者ぞ』と尋ねて候へば『宣旨の御使』と申す。　當時は、諸國の竊盜、强盜、山賊、海賊など申す奴原が、或は『公達の入らせ給ひたるぞ』或は『宣旨の御使』など名のり申すと、かねがね承りて候ふ程に『宣旨とは何ぞ』とて、切ったるに候ふ。　凡そ信連、物の具をも思ふやうに仕り、金善き太刀をも持ちて候はんには、只今の官人どもをば、よも一人も安穩にては返し候はじ。　其の上、宮の御在所は、いづくに渡らせ給ひ候ふやらん、

知り參らせぬ候ふ。假令、知り參らせ候ふとも、侍ほどの者の、一度申さじと思ひ切りてんことを、糺問に及びて、申すべき樣なし」とて、其の後は物も申さず。幾らも並み居たりける平家の侍ども「あっぱれ剛の者や。これらをこそ一人當千の兵ともいふべけれ」と、口口に申しければ、その中に、或人の申しけるは「あれが高名は、今に始めぬことぞかし。先年、所にありし時、大番衆の者どもの止め兼ねたりし强盜六人に只一人追ひかかり、二條堀川なる所にて四人切り伏せ、二人生捕りて、其の時なされたりし左兵衞尉ぞかし。あたら男の斬られんずることの、無慚さよ」と、惜しみあへりければ、入道相國、いかが思はれけん「さらば、な斬りそ」とて、伯耆の日野へぞ流されける。

平家亡び、源氏の世になりて、東國へ下り、梶原平三景時につきて、事の根元一一に申したりければ、鎌倉殿神妙なりと感じ給ひて、能登の國に御恩蒙りけるとぞ聞こえし。平家物語

十五　高倉院

作者未詳

高倉の院御在位の御時、人の從ひつき奉ることは、恐し。

らくは、延喜天暦の帝と申すとも、是れにはいかで勝らせ給ふべきとぞ人申しける。大方賢王の名をあげ、仁徳の行を施させおはしますことも、君御成人の後、清濁をわかたせ給ひての上の御事にてこそあるに、むげに、この君はいまだ幼主の御時より性を柔和に受けさせおはします。

去ぬる承安のころほひは、御年十歳ばかりにやならせおはしましけん、餘りに紅葉を愛でさせ給ひて、北の陣に小山を築かせ植もみぢの誠に色を美しうもみぢたるを植ゑさせ、紅葉の山と名づけて終日に叡覽あるに、なほ飽きたらせ給はず。然るを、或夜野分はしたなう吹きて、紅葉皆吹きちらし、落葉すこぶる狼藉なり。殿守の伴の造朝ぎよめす」とて、これを悉く掃き捨ててけり。殘れる枝散れる木の葉をば搔き集めて、風すさまじかりける朝なれば、縫殿陣にて酒を煖めてたべけるたき木にこそしてけれ。

奉行の藏人、行幸より先にと急ぎ行きて見るに、跡かたなし。「如何に」と問へば、しかじかと答ふ。「あなあさまし。さしも君の執し思し召されつる紅葉を、かやうにしつる事よ。知らず、汝ら禁獄流罪にも及び、

我が身もいかなる逆鱗にかあづからんずらん」と思はじ事なう案じ續けて居たりける處に、主上いとどしく夜のおとどを出でさせもあへず、かしこへ行幸なりて、紅葉を叡覽あるに、なかりければ「いかに」と御尋ねありけり。藏人何と奏すべき旨もなし、ありのままに奏聞す。天機殊に御心よげに打ち笑ませ給ひて「林間に酒を煖めて紅葉を燒く」といふ詩の心をば、されば、それらには、誰れか教へけるぞや。やさしうも仕りたるものかな」とて、却って叡感にあづかりし上は、敢へて勅勘なかりけり。

また安元のころほひ御方違の行幸のありしに、さらでだに鷄人曉を唱ふる聲、明王の眠を驚かす程にもなりしかば、いつも御寢覺がちにて、つやつや御寢もならざりけり。況やさゆる霜夜の烈しきには、延喜の聖代國土の民どもがいかに寒かるらんとて、夜の御殿にして御衣を脱がせ給ひける事などまでも思し召し出でて、我が帝德の至らぬ事をぞ御歎きありける。やや深更に及びて、程遠く人の叫ぶ聲しけり。供奉の人人は聞きもつけられず、主上は聞こし召して「只今叫ぶは何者ぞ。あれ見て參れ」と仰せければ、

上臥したる殿上人、上日の者に仰せて尋ぬれば、或辻にあやしの女の童、長持の蓋さげたるが泣くにてぞありける。「いかに」と問へば「主の女房の、院の御所に候はせたまふが、此の程やうやうにして仕立てられつる衣を持ちて參る程に、唯今男の二三人まうで來て奪ひ取りてまかりぬるぞや。今は御裝束があればこそ御所にも候はせ給はめ。又はかばかしう立ち宿らせ給ふべき親しき御方もましまさず。是れを思ひ續くるに泣くなり」とぞいひける。

さて彼の女の童を具して參り、このよし奏聞したり

ければ、主上聞こしめして「あな無慚、何者のしわざにてかあるらん」とて龍顔より御涙を流させ給ふぞかたじけなき。「堯の代の民は堯の心のすなほなるを以って皆直なり、今の世の民は朕が心を以って心とする故に、かたましきもの朝にありて罪を犯す。是れ朕が恥にあらずや」とぞ仰せける。「さるにても取られつらん衣は何色ぞ」と仰せければ、しかじかの色と奏す。建禮門院、その時はいまだ中宮にて渡らせ給ふ時なり、その御方へ「さやうの色したる御衣や候ふ」と御尋ねありければ、先のより遙かに色美しきが

参りたるを、件の女童にぞたまはらせける。「いまだ夜深し。又さるめにもぞ逢ふ」とて上日の者をあまたつけて、主の女房の局まで送らせましましけるぞかたじけなき。されば、あやしの賤の男賤の女に至るまで、ただ、この君千秋萬歳の寶算をぞ祈り奉る。平家物語

十六　雲察上人に答ふる書　太宰春臺

兩令徒、並びに貴邑御役人衆の由、早川森村二子の詩文御見せ成され、何れも熟覽致し候。未だ相見も致さず率爾の至に候へども御丁寧の御紙面故、御所望に任せ一二點竄仕り進じ申し候。さてさて何れも劣られざる才子にて御座候。且は師兄御指南の力、感じ入り申し候。此の地などは將軍の御膝下、天下の都會にて御座候へども、存じの外才子拂底に御座候。拙者方ばかりにても之れなく、南郭方にも未だ承らず候。長州は周南教授にて、才子數多出來申し候。近來峽中

太宰春臺
薩園讌集圖

などに才子一兩人見え候うて、をりをり詩文見せに越し申し候。然らば、とかく田舍に才子出來候と存じ候。楚人の咻之れなく、一師の說を守り、專心に學び候故とならでは存ぜられず候。一向宗に申し候專修正行、大都にては雜行雜修に成り候故と存じ候。誠に專修正行にあらずしては、佛果は得られずと申す事、始めて領解仕り候。ここに至り候うては、火宅僧と申しながら、親鸞上人の敎至極と感心仕り候。其の許にても隨分此の旨を御說法なさるべく候。此の地にては、とかく衆生濟度なりがたく見え申し候。舍衛三億の衆生是非なく候。此の度御見せなされ候草稿ども外人に多く見せ候うて、ひけらかし吹聽致し候。以上。紫芝園國字書

○わが一生

福澤諭吉

回顧すれば六十何年、人生既往を想へば、恍として夢の如しとは、毎度聞くことであるが、私の夢は至極變化の多い賑やかな夢でした。舊小藩の小士族、窮屈な小さい箱の中に詰め込まれて、藩政の楊枝をもって重箱の隅をほじくる、その楊枝のさきにかかった少年がひょいと外に跳び出して、故郷を見捨てるのみか、生來敎育された漢學流の敎をうちすてて、西洋學の門に入り、以前に變はった書を讀み、以前にか

はった人に交はり、自由自在に運動して、二度も三度も外國に往來すれば、考は段段廣くなって、舊藩はさて置き、日本が狹く見えるやうになってきたのは、何と眼やかな事で、大きな變化ではあるまいか。

或は、その間の艱難辛苦など述べ立てれば、たいそうのやうだが「のどもと過ぐれば熱さを忘れる」といふその通りで、艱難辛苦も過ぎてしまへば、何でもない。貧乏は苦しいに違いないが、その貧乏が過ぎ去った後で、昔の貧苦を思ひ出して、何が苦しいか、却って面白いくらゐだ。私は洋學を修めて、その後、どうやらかうやら、人に不義理をせず、頭を下げぬやうにして、衣食さへ出來れば大願成就と思って居た處が、また圖らずも王政維新、いよいよ日本國を開いて、本當の開國となったのはあり難いことであった。

幕府時代に私の著はした西洋事情なんどを出版する時の考には、天下にこんなものを讀む人があるか、無いか、それも分からず、たとひ讀んだからとて、これを日本の實際に試みるなどといふことは、固より思ひも寄らぬことであった。

然るに、この著述が世間に流行して、實際の役に立つのみか、新政府の勇氣は西洋事情の類ではない、一段も二段もさきに進んで、思ひ切った事を斷行して、あべこべに著述者を驚かすやうなことも、をりをりあった。

そこで、私もまた以前の大願成就に安んじて居られない「これは面白い、この勢に乘じて、更に大いに西洋文明の空氣を吹き込み、全國の人心を根柢から轉覆し、絶遠の東洋に一新文明國を開き、東に日本、西に英國と相對して、後れを取らぬやうになられないものでもない」と、ここに第二の誓願をお

こして、さて、身に叶ふ仕事は、三寸の舌一本の筆より外に何もないから、身體の健康を頼みにして、專ら塾務をつとめ、また筆を弄び、種種さまざまの事を書き散らしたのが、西洋事情以後の著譯です。一方には大勢の學生を敎育し、また演說などをして思ふことを傳へ、また、一方には著書飜譯、隨分忙しい事でした。

ところで、顧みて世の中を見ると、堪へ難い事も多いやうだが、一國全體の大勢は改良進歩の一方で、次第次第に上進して、數年の後、その形にあらはれたのは、日清戰爭など、官民一致の勝利、愉快とも、有り難いとも、いひやうがない。「命あればこそ、こんな事を見聞するのだ。前に死んだ同志の朋友が不幸だ。ああ見せてやりたい」と、毎度私は泣きました。實を申せば日清戰爭、何でもない、ただこれ日本の外交の序

開きでこそあれ、それほど喜ぶわけもないが、その時の情に迫れば、夢中にならずには居られない。

凡そ、こんなわけで、その原因はどこにあるかといへば、新日本の文明富强はすべて先人遺傳の功德に由來し、われわれどもは、丁度都合のよい時代にうまれて、祖先の賜をただ貰った樣な者に違ひはないが、とにかくに、自分の願にかけて居たその願が、天の惠、祖先の餘德によって、首尾能く叶った事だから、私の爲には第二の大願成就といはねばならぬ。それゆゑ、私は自分の既往を顧みれば、遺憾なきのみか、愉快な事ばかりであるが、さて、人間の慾には際限のないもので、不平を云はすれば、まだまだ幾らもある。外國交際、または內國の憲法、政治などに就いて、それこれといふ議論は、政治家の事として差し置き、私の生涯の中に、でかして見たいと

思ふことは、全國男女の氣品を次第次第に高尚に導いて、眞實文明の名に恥づかしくないやうにする事と、佛法でも耶蘇教でもいづれでも宜しい、これを引き立てて多數の民心を和らげるやうにする事と、大いに金を投じて有形、無形、高尚な學理を研究せしむるやうにする事と、およそこの三個條です。人は老いても、無病なる限は、ただ安閑としては居られない、私も、今の通りに健全である間は、身に叶ふだけの力を盡くすつもりです。福翁自傳

十七　福澤先生を悼むその一

島田三郎

三田の高臺に長嘯して、天下の瞻望を維ぎ、一管の筆を揮ひて泰西の文物を輸入し、三寸の舌を鼓して平民の氣焰を揚げたる當代の巨人福澤先生逝けり。痛悼にたふべけんや。

先生は一代の師表にして、明治の社會、先生に負ふ所極めて大なり。曩に先生中風の症に惱み、一時世人を痛憂せしめたるも、其の後輕快に赴き、漸く健康に復するを傳ふ。聞く者皆愁眉を開きて之れを祝せざるはなし。吾人以爲へらく「先生齡六旬を超えて、一旦大患に罹る、其の快談健筆、以って社會を鞭撻啓發せる故態に復せんこと難かるべし」と。然れども、此の大平民の社會に存するは、後進の恃んで心を強

くする所なり。即ち其の優遊自玉、一日を永くし、以って吾人の志に酬いんを願ふこと甚だ切なりき。

然るに天慭ひて此の老を遺さず、遂に本月三日午後十時を以って、白玉樓に徵し去る。嗚呼、先生の音容また接すべからず、豈哀惜嘆嗟にたへんや。

先生の出處經歷、其の主義、其の功績は、普く世人の知る所なり。其の社會に對する關係より家庭の生活に至るまで、其の著書と自傳とに昭晰詳悉す。吾人今之れを繰り返す必要なし。然れども、其の梗概を約述し、吾人の所觀を附記するは、亦敬慕追念の志を表する所以なり。

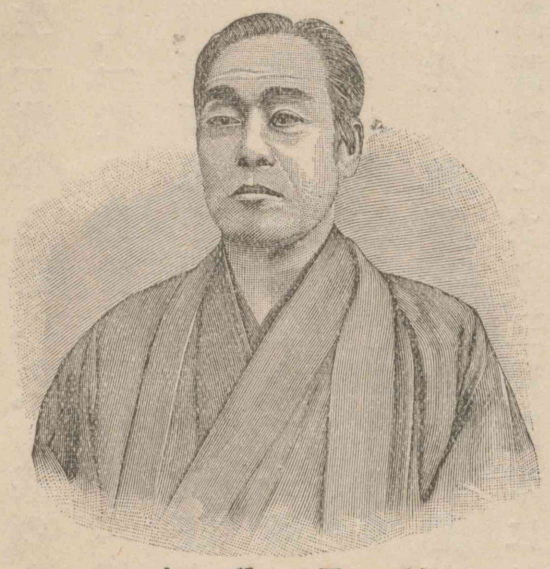
先生の嚴父は中津藩士にして、子女五人あり、先生は其の季子なり。天保五年十二月二日、大阪の中津藩邸に生まる。三歲にして父を喪ひ、母子共に中津に歸る。幼時の教育は、尋常の鄕學に漢書を誦習せるに過ぎず。然れども、其の辨識の力は、讀書の力に越えて、早く等輩を凌駕したりといふ。安政元年二月、先生二十一歲、是れよりさき米使來航し、海内騷然たりしが、泰西兵術の講習を必要とするにいたり、先生また砲術研究の志を懷きて長崎に赴けり、是れ蘭書

讀習の機緣なり。明年大阪に來たりて、緒方洪庵先生の塾に入る、是れ先生生涯の一轉機なり。蓋し其の初め蘭書そのものに意なく、之れによりて砲術を解する媒と爲しし者、其の學漸く進むに至りて、純乎たる蘭學研修者となれるなり。病の爲に一旦中津に歸りしが、幾時ならずして再び緒方塾に復り、學益進み、塾頭に擧げらる。安政五年、藩の徵に遭ひ、江戸藩邸の蘭學教授となる。當時米人の交際よりして、英語の用益多し。先生の炯眼早く轉學の必要を覺り、同學諸氏の說に反し、刻苦して英書を研修す。

安政六年十二月、幕府使臣を米國に派す、先生其の護衞艦咸臨丸の艦長木村攝津守に乞ひ、從僕となりて米國に入り、其の文物を實見し、明年五月を以って歸朝す。是れ先生生涯の一大轉機にして、後來の事業此の觀光の時に得たる者多し。文久元年十二月、幕府使節を遣はして、歐洲諸國を歷訪せしむ。先生飜譯方を以って隨行し、英佛獨蘭葡露の諸都を觀て歸り、見聞益廣し。我が社會の暗中に世界的光明を透したる西洋事情の一書は、實に此の行の產物なり。慶應三年軍艦購入の件を以って、再び米國に赴く。

先生の意見は是れらの旅行毎に轉進し、開國の必要を確信し、幕府舊來の階級制と、勤王に伴なふ所の鎖國論とは、共に先生の信仰と背馳し、到底相容るる能はず。先生飜譯官たるを以って、内外交渉の機事、皆其の司る所の文書により、之れを知るを得て、幕府の敗亡、國勢の變轉、早くも先生の眼底に映ぜり。先生は唯政權の推移を洞看せしのみならず、社會事物の變化を豫知し、早く雙劍を鬻ぎて帶刀の風を棄てたるは、維新の際、士人長刀を挿みて殺氣天下に充てる間に在り。

既にして維新の業成り、政府大いに人材を登用して、洋學通明の士多く徵用せられ、先生亦其の召命に遭へり。然れども、固辭して就かず、其の得る所を以って、社會を啓發せんと欲し、ここに自ら天下開導の大任を負ひ、首として慶應義塾を設けて後進を教育し、又著述飜譯を以って世人を開誘せり。爾來



福澤諭吉（寫眞）

三十四年、藩邸に塾を立てしより四十五年、通じて學生一萬餘を養へり。其の人、社會各般の階級に出身し、一般の進歩を助く。先生又明治十五年を以って、時事新報を開刊し、政黨旺盛政爭劇甚の間に、別に社會教育を主義として一般の知識を開き、又爭議を判するに任ぜり。

先生は教育家なり、時代思想の鼓吹者なり。幕府の飜譯方となり、三回歐米に航せし外、何の經歷あらず。其の後半の生涯は三田の高臺に逸居して、三十餘年を經過す。波瀾なく變化なし。然れども、其の言論文章を以って一世を鼓動し、社會を陶冶したる偉大の勢力は、唯當世比なきのみならず、古今有數の者と評せざる可からず。蓋し嘉永安政以後、日本は海外潮流の中に漂ひ、新舊の思想相鬪ふに際し、先生新想誘引の先達となり、舊世界の殘壘を破りて一大勝利を博し、先登の月桂冠は確かに其の頭上に加へられし者なり。福澤先生哀悼錄

十八　福澤先生を悼む　その二

島田三郎

先生の學專攻なし、故に一科の長所なく、又獨創の發

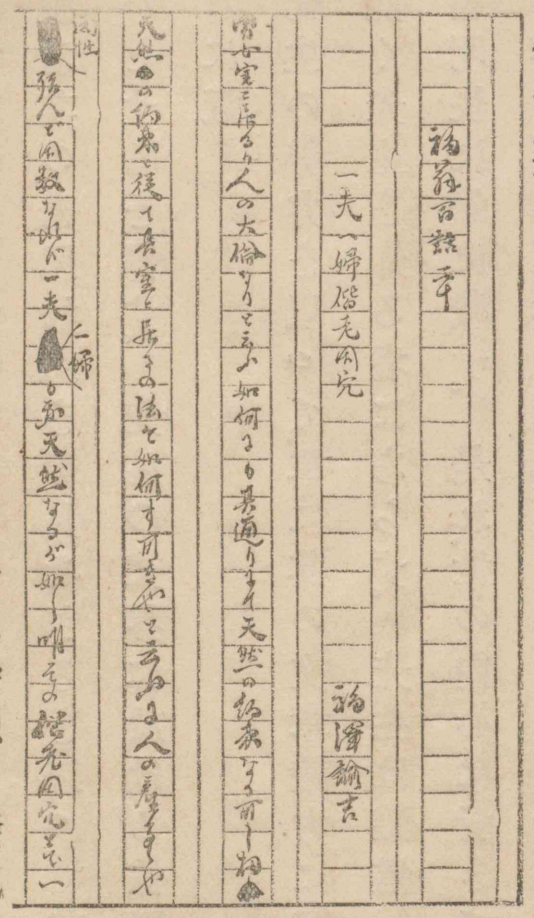
明あらず。然れども、思想博大、常識敏明、進歩の見解を一切の事物に應用して、之れを社會に廣布する能力に至りては、萬人に超絶せり。且其の識見は常に社會に先んぜり。先生、幼時、儒教の薫陶を受け、其の長崎に赴くや砲術を修めんと欲し、端なく蘭書を誦習せり。此の際既に砲術の以って志を成すに足らざるを覺れり。其の江戸に來たり、横濱に遊びて、英語の商牌を讀む能はざるや、忽ち蘭學を棄てて英語を學べり。其の海外に遊んで歸るや、幕府の衰滅免るべからざるを看取し、再び米國に入るや、兵器を購

ふかはりに、書籍を買うて歸り、戊辰戰亂の間、冷然書を講じて顧みず。王政復古、士皆進仕を榮とするに際し、巷間に俯して後進を誘掖し、戰餘の殺氣未だ收まらざるに、雙刀を脱して市民と稱せり。漢儒が門人を食客と同視する時代に、授業料を收むる學校組織を立て、政爭喧擾の間に、社會的薫陶に力を致せり。是れ皆時流に先だてる見にして、當世に拔きんづる眼を有するにあらざれば能はざるなり。

先生は百代を洞看し、宇宙を解釋する哲學者にあらず、天人冥合、靈魂救濟を志とする宗教家にあらず、立

言の不朽を期し、造化の機祕を窺ふ科學者にもあらず、詞を修め句を錬る文士にもあらず、否却って文學の爲に思想を犧牲にする陋習を打破せんとせる人なり。之れを要するに、一代の著述文章は、崇高宏大深邃幽玄の思想界に觸るるにあらずして、毎時眼前の程度より一等を高めんとするに在り。其の見解分明、信仰確實、平易大膽の文を以って之れを宣傳す、其の多數を動かして、偉大の効果を收め、優に社會改造の目的を達せしは之れが爲なり。先生の筆述、前後五十部百五册、其の全集に收めらる。此の他、時事

新報に載する者を合せば、更に多からん。佛人ティン、曾て英國文界の偉人ジョンソンの全集を研究して、言って曰はく「其の十九世紀に於いて新に學ぶべき奇思妙想を發見せずと雖も、其の十八世紀の必要に應じて、社會を裨益せし者



福澤諭吉書
（福翁自傳）

多し」と。ジョンソンの勢力當時に盛んなりし所以、其の文書の一世に功ありし所以、ここに在り。後の讀者其の奇思妙想を發見せざるを以って其の功を小とするを得ず。先生の文界に於ける位置、蓋し之れに近し。

先生の勢力を以って、單に其の文章識力に歸するは、能く先生を知る者にあらず。先生は確信實行を大膽明快に筆に載す。是れ、世の、内心に背きて筆端に巧辭を弄する者と異にして、能く世を動かす所以にあらずや。其の獨立自尊を說くや、口舌文章に於いてするのみならず、之れを其の躬行に於いてし、其の歐米の文明を艶稱するや、之れを事物に應用し、其の自主平等を宣傳するや、階級隷屬の生活を破るに汲汲とし、其の官尊民卑の弊を論ずるや、自身軒冕を泥塗にする概あり、其の家庭の尊貴を說示するや、先生まづ其の實例を置かんと努めたり。是れ豈確信なき者の得て企つる所ならんや。

先生を以って拜金宗の大和尚と爲し、節義を輕んずる者と爲すは、尤も先生と其の時代とを曉らざる者なり。蓋し先生が歐米の文物を輸入せんとするや、

其の反面に於いて鎖國の舊夢を一掃するに努めざるべからず。自主獨立の主義を宣べんとせば、其の反面に於いて隷屬服從の慣習を打たざるべからず。平民自活の生業を敎へんとせば、武士世祿の依賴心を棄てしめざる可からず。此の過渡の時機に會し、武士の理想的人物を罵倒して、以って一世を警醒せし者、即ち有名の楠公論にあらずや。是れ楠公其の人を擊つに非ずして、武士の舊想を擊ちたる者、恰も一休の俗僧を破せんが爲に、釋迦を罵りたる意に髣髴たり。其の金錢を貴ぶの說法は「武士は食はねど

高楊枝」の氣習を破したる者に過ぎず。之れが爲に世の怒嘲を冒して戰へり、吾人却って先生の勇悍を稱せざる能はず。先生の明治社會に於ける位置は、頗るボルテールが十八世紀の佛國に於ける者に肖たり。先生が歐米の文物思想を總概して輸入せんとし、博大通達の材を以って、盛んに飜譯著述に從事せし所、恰もボルテールが英國に博採せしに似たり。甲が儒敎を說破せし所、恰も乙が羅馬加特力を破壞せんとせし者に類す。而して其の辯銳利、能く破壞の目的を達したれども、其の言奇矯、後進をして誤解

せしめ、一は拜金宗なる一派の信仰を形成し、他は羅馬教を擊破したる者、一轉して宗教其の者を擊破せしが如き看を呈出せり。三田の末流に拜金の臭味あるは、荀卿の説によりて李斯の徒を出だしに類す、吾人は先生を以って、此の宗派の大和尚と認むる能はざるなり。

先生は儒教を痛擊し、自活生業を稱道せしが、先生の行は却って儒教の旨に協へり。是れ一見奇なるが如くなれども、決して奇ならざるなり。先生は形而上の考案に、多くの思を凝らさず、專ら實踐躬行を貴べり。是れ「生を知らずして、焉ぞ死を知らん」との旨に合するにあらずや。先生の歐米の文物を輸入する、專ら制度商業工藝科學の實物的傾向を有し、哲理宗教の研究工夫を要せず。是れ性と天道とを語らざる者に類するにあらずや。其の一方に武士的生活を打擊するに拘らず、去就を嚴明にして、處士自ら高うせる迹は儒教の進退節義を言ふ者に類す。其の自尊といふ教訓を以って天爵を全くせんとするは、孟軻の「人人己れに貴き者あり」といふに合し、其の軒冕を泥塗にし、王公に屈下せざる所は大人を藐視

し、晋楚の富と爵とに對するに德と齒とを以ってしたるに似たり。　先生は知識を歐米に博採せしが、其の行實は蓋し幼時の儒學に涵養せられ、唯俗儒の範圍を脱したる者の如し。　之れを聞く「先生の嚴父百助君儒學を修め、伊藤東涯の人と爲りを慕へり」と。堀川の實踐學派、先生の心を養ひし者か。　而して先生少時尤も春秋左氏傳を愛讀せりといへば、其の節義に嚴なる所、由來なしと言ふべからず。

先生晩年著す所、頗る壯年の思想に殊なり。　福翁百話中、往往形而上の問題に渉るものあり。　然れども、

科學的研究の結果にあらず。　先生は結局常識の人なり、實踐の人なり。　博大の思想家にして、精深の考究家にあらず、大膽の論辯家にして、懷疑の批評家にあらず。　唯其の四十年間、一貫の行徑を辿りて、世の風濤に蕩搖せられず、誠實に社會を薫育し、諄諄として倦まず、言行一致、平易の言を立てて、人人行ふを得る道を宣べ、自ら善くし兼ねて人を善くせる、其の大功誰れか先生に比すべき者あらん。　眞に常識の巨人、平民の典型なり。　獨立自尊の四字は、先生の躬行によって社會に現示せられたり。　先生の書は、以っ

て先生を評するに足らずして、唯其の行實を研究して、初めて能く其の教育を解得すべし。今や此の巨人を失へり、明治社會の損失之れより大いなるはなし。吾人公に於いては平民の典型を奪はれたるを惜しみ、私に於いては敬慕する巨人を失へるを悲しむ。福澤先生哀悼錄

師範學校國文教科書卷四終

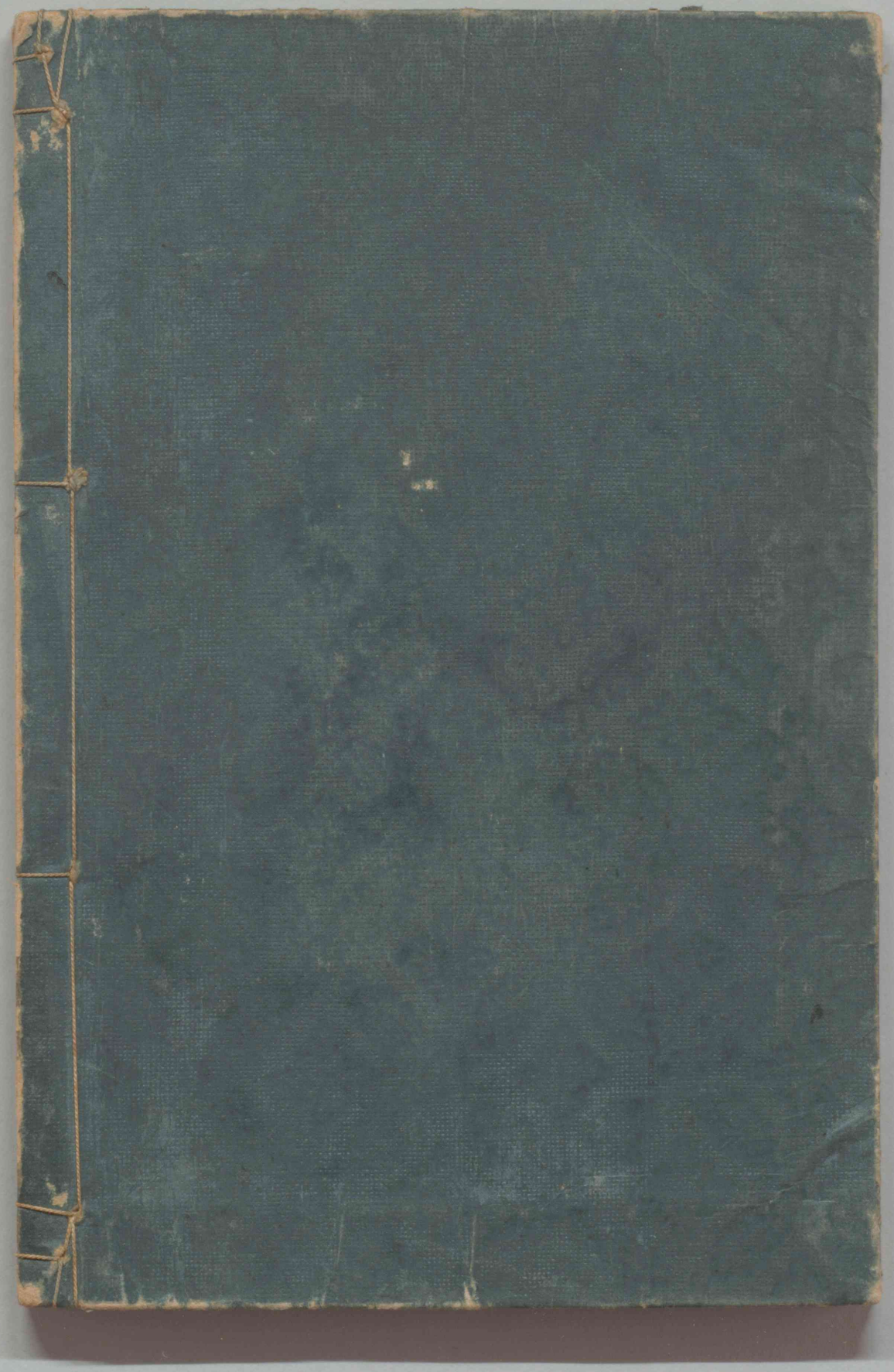
文部省檢定濟
明治三十七年三月二日　師範學校國語科教科書

明治三十六年十二月五日印刷
明治三十六年十二月八日發行
明治三十七年二月廿六日訂正再版印刷
明治三十七年二月廿九日訂正三版發行
明治三十八年八月十日訂正四版印刷
明治三十八年八月十三日訂正五版發行
明治三十八年八月十四日訂正四版印刷
明治三十八年八月十七日訂正五版發行
明治三十八年二月二日訂正六版印刷
明治三十九年四月二日訂正六版發行
明治四十年一月廿三日訂正七版印刷
明治四十年一月二十日訂正七版發行
明治四十一年十一月十四日訂正九版印刷
明治四十一年十一月十九日訂正九版發行
明治四十一年十一月十五日訂正十版印刷
明治四十一年十一月十八日訂正十版發行

師範學校國文教科書　卷四
正價金貳拾八錢

著者　吉田彌平
東京市神田區裏神保町六番地
編者　上原才一郎
東京市神田區裏神保町六番地
發行者　光風館書店
東京市神田區裏神保町六番地
（電話本局二千三十九番）
（振替貯金口座三二七番）
發行所
印刷者　矢島一三

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は發行所へ直接御注文被下候はば直に送本可致候

吉田　著作權所有

（白井印刷所　東京印刷株式會社）